

## 日露戦争と烈士顕彰——脇光三をめぐる動向を中心に——

平 崎 真 右

**要旨** 本論文は、一九〇四（明治三七）年二月から一九〇五（明治三八）年八月までの日露戦争において、日本陸軍によって立案された中国大陸における情報・工作活動のうち「特別任務班」と呼ばれる秘密工作を取り上げ、任務遂上で殉職した「烈士」たちに対する顕彰や言説の様子を論じたものである。具体的には、横川省三（一八六五—一九〇四）を班長とする「横川班」——横川以下、沖楨介（一八七四—一九〇四）、松崎保一（一八七四—一九〇四）、中山直熊（一八八〇—一九〇四）、脇光三（一八八〇—一九〇四）、田村二三（一八八二—一九〇四）——を取り上げ、このうち特に脇光三に注目し、他の班員たちとの対照から、脇光三に向けられた顕彰や言説の特徴について検証した。その結果、脇光三に対する言説として、実父である浅岡一（一八五一—一九二六）を介した皇族子女との繋がりが、出身校関係者たちによる継続的な顕彰や語りなどが、他の班員たちと比べた時の際立った特徴として抽出することができた。

なお、本論文には資料として、昭和戦前期に著わされた脇光三の唯一まとまった伝記（未刊行）と考えられる、石橋貞幹『脇光三傳原稿』（一九〇八年六月）に解題を附し、全文を翻刻掲載した。

キーワード…日露戦争 脇光三 特別任務班 烈士 浅岡一

## はじめに

日露戦争は、一九〇四（明治三七）年二月の開戦から、一九〇五（明治三八）年八月のポーツマス講和会議までのおよそ一八ヶ月間にわたり、日本とロシア帝国とのあいだで戦われた戦争である。旅順の攻略、奉天会戦および日本海海戦における勝利などにより、日本側に優位な形で講和会議が開かれ、賠償金こそ取れなかったものの、韓国における日本の優越権や旅順・大連の租借権、長春以南の鉄道、北緯五〇度以南の樺太の譲渡などが認められ、日本側は勢力圏を大幅に広げることとなった。本論文では、この戦争を遂行するうえで日本陸軍によって立案された中国大陸における情報・工作活動のうち、「特別任務班」と呼ばれる秘密工作に従事した班員たちに視点を絞り、取り上げてみたい。

この特別任務班とは、ロシア軍の背後攪乱を目的に陸軍主導で設置された秘密工作隊を指し、おもに中国東北部、満洲地域で活動が展開された。<sup>①</sup>全体の班員は四七名、六班に分けられた班員たちはその多くが民間人であり、作戦時には軍属（陸軍通訳）となり参加していた。<sup>②</sup>この六班のうちの一つに、横川省三（一八六五—一九〇四）を班長とする「横川班」がある。横川班は班長の横川以下、沖楨介（一八七四—一九〇四）、松崎保一（一八七四—一九〇四）、中山直熊（一八八〇—一九〇四）、脇光三（一八八〇—一九〇四）、田村一三（一八八二—一九〇四）の六名からなり、彼らは任務の途上でみな殉職したが、それもあずかり戦時中より「烈士」として報じられ、その後も特に一九四五（昭和二〇）年の敗戦まで、慰霊や顕彰の対象として繰り返し言及されていくことになる。この烈士たちはどのような顕彰を受け、さらには語られていくのであろうか。

本論文では、この横川班に向けられた顕彰や言説の様子を検証していく。その際には、班員の一人であった脇光三（以下、光三）に特に注目し、他の班員たちと比較対照するなかで、光三に向けられた顕彰や言説の特徴について論じてみたい。そのため、まず前提として光三の家庭環境と清国渡航までの略歴をたどり、家族構成や学修歴、北京に着いてからの活動と特別任務班への参加および死去までを確認する。次に、日露戦争時の新聞を中心に横川班に対する報道状況をたどりつつ、あわせて光三に対する報道の特徴を抽出する。ここでは特に、光三の実父である浅岡一と、当時浅岡が奉職していた華族女学校さらには皇室との関係に言及する。さらに、日露戦後の様々な烈士顕彰の様子を具体的に確認し、最後に、光三に向けられた活動と語りの特色についてあらためて考察していく。

なお、本論文には資料として、昭和戦前期に著わされた光三の唯一まとまった伝記と考えられる、石橋貞幹『脇光三傳原稿』（一九〇八年六月）を翻刻掲載した。本文中でも触れるように、光三の実父より依頼を受けて著わされた伝記は該稿が唯一と考えられ、その後の光三をめぐる語りのひな型を提供したものと推考される。これまで未刊行であった該稿の資料価値を鑑み、解題とともに全文を付すこととした（以下、本論中では敬称の類を省略し、資料の引用にあたっては、『脇光三傳原稿』を除き、旧字体はすべて新字体に改めた）。

## 一 脇光三の家庭環境と渡清

本章では、光三の家庭環境、学修歴、そして一九〇二（明治三五）年五月に当時の清国へと渡航してから死去までを略述する<sup>③</sup>。

光三は、一八八〇（明治一三）年二月一日、旧二本松藩士である浅岡一（一八五一—一九二六）の三男として

東京府麹町に出生した。翌年一〇月には、東京宅の近隣に住んでいた旧彦根藩士・脇他三郎（一八三九—一八九三）の養子となり、以後は内務省勤務の養父の転勤にともない、福島、山形、広島などを転居する。一八九三（明治二六）年八月には養父他三郎が病死するが、他三郎は死去前に浅岡へと光三を託し、浅岡は光三だけではなく養母である寿子も含め、浅岡家に引き取ることとなった。このこともあり、浅岡はそれまで勤めていた長野師範学校長を辞任し、同年一二月には東京の華族女学校に教授として赴任、光三らを連れて再度東京へ転居することとなる。

光三の修学が本格化するののは、東京へ戻って以降である。一八九七（明治三〇）年四月、日本中学校（現日本学園中学高等学校）へと編入学し、三年後の一九〇〇（明治三三）年三月に卒業したあと、陸軍士官学校への進学を志すも、体格検査により不合格となる。士官学校への進学を閉ざされた光三は、同年四月に仙台の第二高等学校医学部（薬学部とも）へと入学するが、翌一九〇一（明治三四）年八月には同校を中途退学、同年九月に、その前年に創設されたばかりの台湾協会学校（現拓殖大学の前身）へと転学する。しかしこの台湾協会学校も翌一九〇二（明治三五）年五月に退学し、光三は同月中に北京へ向けて横浜より出港、朝鮮の仁川、天津を経て翌月には彼の地に赴き、「東文学社」という教育機関で現地人に日本語を教える仕事に就く。

以上が渡清するまでの概略だが、ここで注目されることは、東京に戻るまでの幼年期および東京へ戻って以降の学修期ともに、一つの場所に留まることなく、各地あるいは各校を転々としていることである。幼年期は養父および実父の転勤に従う形ではあるが、日本中学卒業以降に進学した第二高等学校、そして台湾協会学校は、それぞれ一年四ヶ月、一〇ヶ月で退学している。第二高等学校から台湾協会学校への転学については資料が乏しく不詳であるが、台湾協会学校在学時に出会った清語講師・賀梧桐（一八七三—？）との関係や、来校した児玉源太郎（一八五二—一九〇六）の講演に感化を受けたことなどもあり、ついに活動の場を国外へと移すことになる。

渡清後の光三は、先述のように「東文学社」で日本語を教え、同社を辞したあとは一時日本語学校を設立して教えたといわれるが、一九〇三（明治三六）年九月には天津の「北支那毎日新聞社」に勤務し、「脇華堂」の筆名で活動する。そして翌年一九〇四（明治三七）年二月、日露戦が始まり陸軍内に特別任務班が組織されるやその一員となり、陸軍通訳の職位で任務に従事するも失敗、同年四月に内蒙古のクローンホ附近で殺害されるに至る。

## 二 新聞報道にみる烈士たち

前章末では特別任務班に参加した光三の死去までを確認したが、特別任務班の活動は戦時中より情報管制が敷かれていたため、光三をはじめとする班員たちがどのような活動をし、顛末をたどったのかについては、すべて彼らの死去後に公に知られることとなった。その際に情報伝達の役割を果たしたのが、新聞メディアである。本章では戦時・戦後に新聞で報じられた横川班および光三関連記事を取り上げ、報道のあり方について確認する。

まず、横川班に関する報道について押さえておく。六名のうち最も早くその死が伝えられたのは、班長である横川省三と、横川と共に処刑された沖楨介との二名である。例えば『東京朝日新聞』の報道では、まず一九〇四（明治三七）年五月四日付「被捕獲勇士の最期（関東報記事）」において、旅順口で発刊される『関東報』に拠りながら横川・沖の捕縛と軍法会議、銃殺刑の様子について報じ、次いで五月二一日付「横川沖両士の最期」では自社特派員による記事をあらためて掲げ、さらに五月二七日付「横川沖両氏に関する詳報」、六月六日付「沖楨介氏追悼会」など、両名の死と顛末を継続して報じる。その後、六月二四日付「志士又敵手に倒る」では光三と中山直熊が、七月三日付「無限の憾（田中松崎二烈士の事）」では田村一三と松崎保一が取り上げられ、五月から七月にかけて横川班全員の殉難が

報じられている。また、経緯を伝えるだけでなく、各人の人となりについても詳細が付されており、これらの新聞報道によって特別任務班（横川班）の任務内容とその顛末、さらには班員各自のパーソナルな情報を、読者は新聞を通して知ることができたであろうことがうかがえる。

次に、特に光三の名前がみえる報道として、『読売新聞』と『東京朝日新聞』紙上の関連記事を確認しておきたい。関連記事を整理したものが、表1・2である（表作成は筆者）。

両紙の報道傾向には若干の違いが認められる。すなわち、『読売新聞』が光三の死および追悼の出来事を淡々と報じるのに対し、『東京朝日新聞』ではそれら事実の報道に加え、光三の家族や知友とのやり取りなど、パーソナルな側面を比較的に詳しく取り上げていることである。それは関連記事数の多寡にも反映され、『東京朝日新聞』は光三の渡清から始まり、特別任務班の任務失敗と光三らの殉難を集中的に取り上げる一方で、『読売新聞』では任務失敗と殉難、戦後の合祀、そして大正期の追悼会など、必要最低限の関連動向を簡潔に報じる姿勢が看取できる。ここでは特に『東京朝日新聞』の報道に注目し、以下、光三に注がれた特徴的な視線を確認しておきたい。

光三に関する報道のうち最も特徴的な点は、皇族との関係である。例えば、「脇、中山両志士の名誉」（表2「4」）では、敵手に斃れた光三と中山直熊の慰霊追悼の様子を次のように報じる。

（……）常宮、周宮両殿下には烈士が国家のため倒れたるを深く御悼惜あらせられ其英魂を慰めんと思召し先に横川、沖両氏を高輪御殿内の祭壇に祀らせられたる例に倣はせ玉ひ横川、沖両氏の次へ前記両名士を加えて同祭壇に祀らせられたりと承はる尚両殿下には光三氏の実父浅岡一氏が華族女学校の幹事たるの故を以て少しく心を慰めよとの有難き御言葉に御菓子を添へて下し賜はりしとぞ浅岡家の名誉大なりと云ふべし<sup>4</sup>

表 1

『読売新聞』	
記事名	刊行年月日
1 志士脇光三氏敵手に倒る	明治 37 年 6 月 24 日朝刊
2 間諜に対する処置	明治 37 年 6 月 25 日朝刊
3 合祀せらるる志士	明治 40 年 4 月 24 日朝刊
4 日露戦役の国土追悼	大正 7 年 4 月 12 日朝刊
5 志士追悼会	大正 7 年 4 月 21 日朝刊
6 日露役を彩る秘史	昭和 6 年 3 月 30 日夕刊
7 河原操子女史「続・耳を搔きつつ」	昭和 10 年 3 月 13 日朝刊

出典：『読売新聞』（「ヨミダス」より）

表 2

『東京朝日新聞』	
記事名	刊行年月日
1 日本学生支那遊学	明治 35 年 5 月 29 日朝刊
2 哈爾濱遭難の志士	明治 37 年 6 月 24 日朝刊
3 志士又敵手に倒る	明治 37 年 6 月 24 日朝刊
4 脇、中山両志士の名誉	明治 37 年 6 月 25 日朝刊
5 敵手に倒れし志士又二人	明治 37 年 6 月 27 日朝刊
6 脇光三氏の手簡	明治 37 年 7 月 4 日朝刊
7 志士脇光三氏と高崎男	明治 37 年 8 月 24 日朝刊
8 故横川氏の同志	明治 39 年 5 月 25 日朝刊
9 脇光三氏の遺髪	明治 39 年 5 月 26 日朝刊
10 脇光三氏兄弟の葬儀	明治 39 年 5 月 28 日朝刊
11 両内親王殿下の御仁慈	明治 39 年 5 月 30 日朝刊
12 北京の忠魂祀堂	明治 39 年 6 月 11 日朝刊
13 六志士の行賞	明治 40 年 2 月 3 日朝刊
14 殉難志士叙勲	明治 40 年 3 月 10 日朝刊
15 特旨合祀の志士	明治 40 年 4 月 24 日朝刊
16 横川省三氏等烈士の建碑	明治 41 年 6 月 22 日朝刊
17 敵・味方流れて卅年	昭和 9 年 8 月 24 日朝刊
18 興亜女性の先覚	昭和 17 年 8 月 28 日朝刊

出典：『東京朝日新聞』（「朝日新聞クロスサーチ」より）

ここに現れる「常宮、周宮両殿下」とは、明治天皇の第六皇女・常宮昌子内親王（一八八八—一九四〇、のち竹田宮恒久王妃）および第七皇女・周宮房子内親王（一八九〇—一九七四、のち北白川宮成久王妃）の姉妹を指す。この時一六歳と一四歳であった両内親王が、住まいである高輪御所内に日露戦争の戦死者を祀るための祭壇を設け、そこに

光三と中山の名前が加えられたという。

当時、両内親王による戦死者慰霊の様子は新聞や雑誌によって盛んに報じられており、<sup>(5)</sup> 傷痍軍人や遺族への慰問など、戦時下におけるその活動が注目されていた。<sup>(6)</sup> これより先に殉職が報じられた横川と沖の両名も含め、戦死者は両内親王によって分け隔てなく慰霊追悼されたが、こと光三については、実父である浅岡一が華族女学校の幹事を務めていた関係から、「御言葉」と「御菓子」が下賜されたことが追記されている。

両内親王による光三および浅岡家に対する特別の計らいは、さらに光三の葬儀についても同様であった。先の報道から二年後の一九〇六（明治三九）年五月二十九日、光三とその弟である小四郎二人の葬儀が行われたが、この葬儀を聞いた両内親王が浅岡家へ特別に御菓子料を下賜されたことが、「両内親王殿下の御仁慈」として報じられた（表2「11」）。<sup>(7)</sup> ここでもまた、両内親王から光三および浅岡家に対して個別の弔意と計らいがあり、それが戦時下の戦死者慰霊との連続で報じられているのである。

このような両内親王による一連の計らいは、新聞によって「浅岡一族の名誉」として表現されたが、それは光三の実父・浅岡一にとってもとりわけ印象的であったようである。昭和戦前期に著わされた光三の唯一まとまった伝記と考えられる、石橋貞幹（一八五六—一九二三）による『脇光三傳原稿』（一九〇八＝明治四一年六月）は、序相当部において浅岡から石橋へと執筆依頼のあったことが示される未刊行資料であるが、浅岡が両内親王のもとへ参上した時の様子につき、浅岡自身の言葉を交えて次のように記す。

光三の死を聞こし召されし折華族女学校教授兼学監常宮周宮両殿下御用掛り下田歌子女史浅岡氏を訪はれ常宮周宮両殿下には光三の壮舉を聞こしめされ「困難の事に従ひ君國の爲めに尽せし真心の健氣<sup>けなけ</sup>さよ其父母の心の内も



思ひやらる、厚く慰めてよ」との御言葉を蒙れりと傳へられ且ツ是は皇后陛下より両殿下へ賜はりし御菓子なるを更に両殿下より賜はるるを傳へられ猶写真もあらは御覽遊はされ度思召なりと添て傳へられしがは浅岡氏は思召の有り難きに感泣し翌朝高輪御殿へ伺候して両殿下の御養育掛り佐々木伯爵に頼りて御礼を申上且ツ写真（六士を一枚二写せしもの）を捧けしに恐れ多くも此時御学問所に於て戦争中負傷せし者の爲めにとて御手つから細帯を御製作遊はせられし御場合にも拘らす直に拝謁仰せ付けられ伯爵及同夫人に導かれて御前に拝伏せしに「此度のことと……察し入る」と仰せられし様に承りたれとも恐懼無涯且つ御声の静なりし故明かに耳に留まらざりしと浅岡氏は人に語られき<sup>(7)</sup>

以上のように、光三の死および慰霊追悼に関する報道では、他の班員たちと比べた時、皇族との繋がりがたびたび強調されていたことがわかる。もちろん、他の班員たちも両内親王の慰霊追悼を受ける点では等しいが、光三および浅岡家には、それとは異なる個別の弔意が注がれていた。その理由として、実父である浅岡が当時華族女学校に奉職する立場であったことも、報道内では言及されていた。『脇光三傳原稿』ではその経緯が詳しく記されており、両内親王からの「御言葉」と「御菓子」は下田歌子（一八五四—一九三六）を介して下賜されたことがわかる。この下田歌子と浅岡は華族女学校の同僚で、下田は学監、浅岡はそれに次ぐ幹事の任にあり、互いに学校経営と子女教育の要職にたずさわる間柄であった。<sup>(8)</sup> 実父である浅岡が、両内親王から個別の弔意を賜ったことにより、光三の死は特に皇族と結びつけられる形で報道されたのである。

### 三 様々な顕彰——建碑・伝記・追悼会ほか——

前章では、戦時中および戦後まもなくの新聞報道を確認したが、横川班の班員たちは戦後しばらくを経過してより、班あるいは個別に顕彰されていくことになる。ここでは石碑や銅像といった建碑建造物類や伝記刊行物、追悼会や劇・映画・音楽などの事例を取り上げながら、班員たちの顕彰、さらには光三に向けられた語りの様子を押さえておきたい。

#### 三— 建碑・建造物類

まず、建碑や建造物類に関するおもな事例を整理したものが、表3である（表作成は筆者）。ここではおもだった事例を瞥見する。

班全体については、戦後三年が経過した一九〇八（明治四一）年五月、東京小石川の護国寺境内に「報国六烈士碑」が建碑された（表3「1」、図1<sup>9</sup>）。題額は元帥公爵・大山巖（一八四二—一九一六）、撰文は陸軍中将・福島安正（一八五二—一九一九）による。大山も福島も、日露戦争時には満洲軍総司令官および満洲軍総司令部参謀の要職にあったように、この石碑は特別任務班を立



図1 報国六烈士碑

表3 「横川班」関係顕彰物類リスト

「横川班」関係顕彰物類（戦前期：建碑・建造物類 ＊墓所除く）					
班／個人	通し番号	名称	年次	場所	形態
班全体	1	報国六烈士碑	明治 40/1908 年 5 月	東京府護国寺	石碑
	2	志士之碑	大正 10/1921 年	中国・ハルビン郊外	石碑
	3	志士之碑	大正 14/1925 年 4 月	青森県弘前市最勝院	石碑
横川省三	4	志士横川省三君之碑	大正 10/1921 年 5 月	岩手公園（盛岡城跡公園）	石碑
	5	（銅像）	昭和 6/1931 年 4 月	盛岡市高松神庭山	銅像
	6	横川省三記念公園	昭和 13/1938 年 11 月	東京府麻布区笹笠町 24	公園
	7	横川省三碑	昭和 14/1939 年 5 月	岩手県和賀郡十二鎭村	石碑
沖 禎介	8	沖禎介君之碑	明治 40/1907 年 6 月	東京府青山墓地	石碑
	9	沖図書館・沖禎介記念文庫	大正 3/1914 年 4 月	長崎県平戸市	図書館
	10	（銅像）	昭和 11/1936 年 11 月	長崎県平戸市亀岡八幡神社	銅像
脇 光三	11	烈士脇光三碑	昭和 6/1931 年 4 月	東京府茗荷谷拓殖大学	石碑
	12	烈士脇光三碑	昭和 18/1943 年 5 月	滋賀県彦根市	石碑
松崎保一	13	記念碑	不明	中国・奉天	石碑
田村一三	14	田村一三顕彰碑	不明	宮崎県綾町	石碑
中山直熊			不明		

\* 各人を弔った墓所を除き、おもだった石碑や建造物をカウントした。現存しないものも含む。

案した陸軍関係者たちの意向によって建てられたものである。より直接的には、碑文中に「四十一年五月青木少将橋口大佐井戸川少佐等胥謀ト地於東京小石川護国寺刻石不朽其伝」とあるように、青木宣純（一八五九—一九二四）、橋口勇馬（一八六二—一九一八）、井戸川辰三（一八七〇—一九四三）らにより、烈士たちの功績を不朽のものとすべく建碑が企てられた。<sup>10</sup>全文は八三八字の漢文からなり、日露開戦の報を聞いた在清邦人たちが、自身は軍籍にないものの国家存亡に関わる時に傍観してよいのかという義憤のもとに立ち、以下、横川班の活動とその殉難、戦後の叙勲や合祀などに筆が及ぶ。なお、この建碑については当時新聞でも報じられており「横川省三氏等烈士の建碑」表2「16」、世間の耳目を集めたようである。

また、横川と沖が銃殺されたハルビン郊外の刑場跡に、六名を合祀した「志士之碑」が一九二二（大正一〇）年中に建立された（表3「2」）。ここでの撰文は青木宣純による。この石碑は第二次大戦後、中国当局により破壊され現存しない。さらに、一九二五（大正一四）年四月には、青森県弘前市内の最勝院に「志士之碑」が、佐藤俊蔵なる人物を發起人に建立されたといわれる（表3「3」）。<sup>11</sup>

次に班員各人についてだが、班長および中心人物であった横川と沖に関する顕彰が目立つ。横川省三は、「志士横川省三君之碑」が一九二二（大正一〇）年五月に岩手公園（盛岡城跡公園）内に建碑され、一九三一（昭和六）年四月には盛岡市高松の神庭山に銅像が、一九三八（昭和一三）年一月には東京府麻布区内の旧宅跡に「横川省三記念公園」が竣工し、<sup>12</sup>一九三九（昭和一四）年五月には岩手県和賀郡十二鎭村（現東和町）に「横川省三碑（題字・頭山満）」が建立された（表3「4」—「7」）。そして沖楨介は、一九〇七（明治四〇）年六月に「沖楨介君之碑（篆額・乃木希典、撰文・戸水寛人）」が青山墓地内に建碑、一九一四（大正三）年四月には「沖図書館」および「沖楨介記念文庫」が、父親によって長崎県平戸の生家敷地内に設置された。<sup>13</sup>さらに一九三六（昭和一一）年一二月には、同じく

平戸の亀岡八幡神社境内に銅像が建立されている(表3「8」―「10」)。

横川と沖以外の四名については、中山直熊を除きそれぞれ石碑が建てられているが、ここでは光三についてのみ触れておく。

「烈士脇光三碑」(表3「11」、図2)は一九三二年(昭和六)年四月二三日、東京茗荷谷の拓殖大学構内で建碑除幕式が挙行された。題額「芳流」は当時拓殖大学長であった永田秀次郎(一八七六―一九四三)、碑面は陸軍大将・一戸兵衛(一八五五―一九三二)、裏面の碑文は拓殖大学教授の宮原民平(二八八四―一九四四)による。高さ約六・三m、幅約二m、厚さ三三cmほどの大きなものだが、当時この碑の製作と建立の様子は周囲の目を引いたらしく、『読売新聞』には「昨週末校庭に記念碑を建設中であつたが最近漸く竣工」と、建碑除幕式前から記事が掲載される(「日露役を彩る秘史」、表1「6」)。竣工前年の一九三〇(昭和五)年春頃より拓殖大学生らによって建碑が企画され、六月

の学生総会において、創立三〇周年記念事業として満場一致で建立が可決された。<sup>(19)</sup>学内からの光三への言及は、例えば一八期生の石原巖徹(本名・秋朗 一八九八―一九七九)による弔歌(「脇光三君を弔ふ歌」)が一九一九(大正八)年一月に、四期生の宮原民平による評伝(「烈士脇光三氏傳」)が一九三〇(昭和五)年十二月に発表されるなど、<sup>(20)</sup>すでにそれ以前からも散見される。建碑除幕式の後には記念講演会も行われたが、教職員全学生のほか、浅岡家と脇家の遺族、陸軍大将・金谷範三(一八七三―一九三三)、陸軍



図2 烈士脇光三碑

\* 現在は拓殖大学八王子国際キャンパス内に設置。

少将・大谷清磨（一八八六—一九六六）、海外興業会社社長・井上雅二（一八七七—一九四七）ほか六〇名前後の来賓が参加し、全学挙げての開催であったことが学内新聞よりわかる。<sup>(21)</sup>

なお、建碑除幕式が挙行された四月二三日という日取りは、拓殖大学にとっては特別な意味を有している。一九二二（明治四五）年、前身である台湾協会専門学校が明治天皇より恩賜金と御沙汰書を下賜された日であり、それ以来、四月二三日は学内で「恩賜記念日」と称された日付であった。

この恩賜記念日に合わせて建碑除幕式が挙行された点には、学内で光三がいかに特別視されていたのかをうかがうことができる。日露戦時、通訳を中心に従軍した学生のうちで戦病死したものは、光三を含め計七名を数える。<sup>(22)</sup>これら日露戦時の戦死者をはじめ、その後の戦時事変に遭遇して戦死した学友たちを祀る場として、一九三三（昭和八）年四月に「拓殖招魂社」が茗荷谷校内に建立されたが、それはあくまで個々人を合祀する施設である。学校関係戦没者を特に個人として顕彰する建造物は、現在に至るまでただ光三碑を数えるのみである。<sup>(23)</sup>

また、一九四三（昭和一八）年五月には、滋賀県彦根市においても「烈士脇光三碑」が建碑されている（表3「12」）。これは光三が養子に入った脇家が、もと彦根藩士であった所縁によるものだが、大政翼賛会彦根市支部が光三の事跡を顕彰することで、「時局下本市青少年教養ノ資ニセン」<sup>(24)</sup>とする目的から、各町内に寄付を募り製作・建立したものであった。題額は陸軍大将・荒木貞夫（一八七七—一九六六）、撰文は彦根市長・松山藤太郎になるが、敗戦後に撤去され現存していない。

### 三二 伝記刊行物類

次に、横川班に関する伝記刊行物類をみていく。おもだった刊行物をまとめたものが、表4である（表作成は筆者）。

表4 「横川班」関係伝記刊行物類リスト

「横川班」関係伝記刊行物類（戦前期）						
班／個人	通し番号	書名	年次	著編者／発行者	刊／未刊	備考
班全体    横川省三	1	日露戦役殉国志士事蹟	明治41/1908年9月	井戸川辰三	○	六氏の伝を付す
	2	北満の落花	昭和8/1934年11月	岡田猛馬	○	
	3	史実物語 嗚呼六烈士	昭和9/1935年3月	陸軍省つはもの編集部	○	
	4	殉国志士横川省三君小伝	昭和2/1927年10月	横川省三君銅像建設会	○	
	5	烈士横川省三	昭和3/1928年10月	松島宗衛	○	
	6	真人横川省三伝	昭和10/1935年1月	利岡中和	○	
	7	横川省三爆破行・日野少佐新疆行	康德8/1941年12月	満鉄弘報課	○	大陸開拓精神叢書 第9・10合輯
	8	決死の密偵行：国威宣揚物語	昭和17/1942年5月	萩原新生	○	横川・沖を中心に扱う
	9	志士の生涯：横川省三伝	昭和19/1944年6月	伊東峻一郎	○	
沖 禎介	10	志士沖禎介	明治37/1904年8月	村尾要三	○	
	11	軍事探偵 沖禎介	明治41/1908年2月	変哲山人	○	
	12	烈士沖禎介	昭和8/1934年9月	丸山長渡	○	
脇 光三	13	脇光三傳原稿	明治41/1908年6月	石橋貞幹	×	
	14	烈士脇光三君伝	昭和12/1937年4月	佐倉孫三	○	『達山文稿』（漢文）に収録
	15	烈士脇光三氏伝	昭和18/1943年3月	大寄文友・北野源治	○	
松崎保一	16	松崎保一伝	昭和5/1930年10月	小嶋政一郎	?	
田村一三			不明			
中山直熊	17	満蒙血の先駆者：中山直熊、堀部直人、若林龍雄、三君伝	昭和12/1937年3月	松岡勝彦	○	

\*「刊／未刊」欄の「○」は刊行、「×」は未刊行、「？」は刊行情報はあつたものの現物未確認を示す。原則として、「国立国会図書館サーチ」「国立国会図書館デジタルコレクション」により検索・閲覧可能なものを中心にリスト化した。



『日露戦役殉国志士事蹟』(表4「1」)は、前節にみた護国寺「報国六烈士碑」の建碑を企画した井戸川辰三の手になるが、「(注・石碑により)六士の遺烈を不朽に伝ふると共に別に其事蹟を総合して一冊子と為し。以て史家異日の料に資せんと欲す」<sup>(26)</sup>意図から著されたものである。横川と沖が捕えられて以降、軍法会議、処刑、その他四名の顛末、横川と沖の遺骨収拾について記され、さらに六名それぞれの伝が加えられており、先に建碑された碑文を補う内容となっている。ほか、班全体に関するものは昭和の戦時下でそれぞれ軍関係者たちによって著されており(表4「2」「3」、岡田猛馬は哈爾濱特務機関嘱託、陸軍省つはもの編集部は在郷軍人会関係)、特に一九三一(昭和六)年の「満洲事変」以後、六烈士の事跡が軍関係者によってあらためて喚起されている様子がみて取れよう。<sup>(27)</sup>

個々人の伝記についても、早くは日露戦後まもなくの著作もみえるが(表4「10」「11」「13」、その多くは昭和に入ってから刊行が目につく。量的には、建碑類と同じく横川と沖に関するものが多く、光三がそれに次ぎ、田村一三を除き松崎と中山もそれぞれ一書が著される。

これら伝記類の執筆者も、故人を知る友人や、同郷その他の関係をもつものが多いようである。まず横川関係のうち、『烈士横川省三』(表4「5」)の松島宗衛(一八七一—一九三五)は、日露戦時には東京日日新聞の北京特派員として現地に在住し、横川班ほか特別任務班員たちと交流を持った人物である。『真人横川省三伝』(表4「6」)の利岡中和(一八八八—一九七三)は、横川と直接の関係はないものの、自らと同じくクリスチャンであった横川の信仰的側面から人物像を捉えようとしており、<sup>(28)</sup>『志士の生涯 横川省三伝』(表4「9」)の伊東峻一郎は横川と郷が近いようである。また、沖禎介関係のもものでは、『志士沖禎介』(表4「10」)の村尾要三は同郷者、『烈士沖禎介』(表4「12」)の丸山長渡(一八七二—?)は沖の友人である。この村尾と丸山は、一九〇四(明治三七)年六月五日に催行した沖の追悼会の企画参加者でもあった。<sup>(29)</sup>さらに、『脇光三傳原稿』(表4「13」)の石橋貞幹は旧二本松藩士で実父浅岡一



と同郷、『烈士脇光三君伝』（表4「14」）の佐倉孫三（一八六一—一九四一）も二本松出身、『烈士脇光三氏伝』（表4「15」）は前項彦根市の「烈士脇光三碑」と同じく彦根市から刊行されたものである。ほか、『松崎保一伝』（表4「16」）の小嶋政一郎（一八九三—一九七七）は松崎の同郷者、『満蒙血の先駆者 中山直熊、堀部直人、若林龍雄、三君伝』（表4「17」）の松岡勝彦は中山と同郷且つ北京在留中に寝食を共にした仲であった。

このように、班員たちの伝記刊行物は陸軍関係者や友人・同郷者など、近しい関係にあった人物たちによって著されているものが多い傾向にある。

### 三―三 追悼会、視聴覚メディア類

最後に、追悼会のほか、劇、講談、映画、浪曲や琵琶歌などの視聴覚メディア類について整理しておく。

まず追悼会の様子だが、ここでは各人の葬儀類は除いた後日の催しを中心に、関連情報が比較的によく掲載される『東京朝日新聞』の報道からその様子を確認する。掲載された追悼会記事では、年忌開催と、そうではないものとに大別できるようである。

年忌追悼会としては、一九一八（大正七）年四月二日に旧芝区青松寺で開かれた一五年忌追悼会（一九一八年四月二一日付「八烈士追悼会」、四月二二日付「父は陛下の命に依り」、一九二八（昭和三）年四月一五日の神田和泉クラブにおける二五年忌（一九二八年四月一三日付「殉国烈士の追悼会」、一九四三（昭和一八）年四月二一日の小石川護国寺における四〇回忌（一九四三年四月二二日付「六烈士の四十回忌」）などが確認できる。なお、四月二一日の日付けは、横川と沖が銃殺刑となった命日である。

また年忌以外の事例では、一九三三（昭和八）年二月一日には日比谷新音楽堂で「東亜問題先覚志士慰霊祭」と

して、明治初年以來より東亜問題に尽力した民間の有志をはじめ、軍人、政治家、実業家、そして横川班員たちも含む一四三〇名の慰霊追悼が行われた（一九三三年二月一二日付「先覚志士慰霊祭」）。ここには横川の令息や沖の父親も参列したという。翌一九三四（昭和九）年四月七日には旧芝区増上寺で「満蒙殉難十四烈士追悼会」（一九三四年三月一〇日付「十四烈士追悼会」）が、さらに一九三五（昭和一〇）年三月一〇日には青山会館で「日露戦争従軍民間志士慰霊祭」（一九三五年三月一二日付「民間志士慰霊祭」）が催されるなど、时期的には満洲事変後の戦時下での慰霊追悼会が繰り返されている様子がわかる。

次に、劇や講談、映画、浪曲や琵琶歌といった各種事例も、『東京朝日新聞』の報道を中心に時系列で通覧しておく。

早くの事例としては、一九〇四（明治三七）年八月、東京本郷座において横川と沖の事跡を脚色した「戦闘劇」が、新派劇の佐藤歳三（一八六九—？）と水野好美（一八六三—一九二八）によって上演されている（一九〇四年八月一三日付「楽屋すずめ」）。その後は昭和に入ってから事例が増し、一九三四（昭和九）年八月末にはオールトーキーの映画『北満の落花』が製作・公開され（一九三四年八月二四日付「敵・味方流れて卅年」表2「17」）、例えば一九三六（昭和一一）年九月一〇日には、横浜公園音楽堂で開催された「六烈士追憶の夕べ」追悼会においても同映画が上映されている<sup>(30)</sup>。また、一九三五（昭和一〇）年九月一三日には、日本放送協会による「第三回放送文芸懸賞募集」の浪花節で一等を得た「雪の興安嶺（北野一郎作）」が、浪曲師・東家榮燕（一八八七—一九五〇）によって放送され（一九三五年九月二三日付「横川・沖二烈士を語る」）、一九三八（昭和二三）年五月一九日には、横川と沖に関する新講談が放送されている（一九三八年五月一九日付「横☆川☆省☆三」）。この他にも琵琶歌がいくつか作られており、『北満の落花』（表4「2」）の作者・岡田猛馬が一九一八（大正七）年頃に琵琶歌「北満の落花」を、一九三四（昭

和九）年二月には、高峰琵琶の創始者・高峰筑風（一八七九—一九三六）による「志士の鑑（沖禎介、横河省三の最期）」がビクターより発売、そして年次は不明であるものの、筑前琵琶にも「沖禎介（五絃琵琶之曲）」があるようである。<sup>(33)</sup>

これらの事例からは、追悼会の開催だけではなく、劇や映画、浪曲、講談、琵琶歌といった様々な視聴覚メディアへと、烈士たちの実績が展開されていったことがわかる。この動きは現在でいうところのメディアミックスであるが、その視聴覚メディア類では、横川班全体を取り上げるものと、特に横川と沖の二名に焦点を合わせたものが目立つ。またこれらが発表された時期は、前節までに確認した伝記刊行物類と同じく、満洲事変以後に発表されたものが多い傾向も指摘することができよう。

#### 四 脇光三に向けられた活動の特色

前章までに、横川班に関する新聞報道や顕彰の様子を挙げながら、あわせて光三に関する報道や顕彰についてもいくつか確認してきた。本章では、光三に向けられた活動の特色についてあらためて考えてみたい。

横川班に向けられた様々な言及のうちでは、班長である横川省三、そして横川と共に刑死した沖禎介に関する報道や顕彰が多く認められた。同時に刑死したということから、横川と沖は二人一組で語られる傾向が強い一方で、それぞれ個別の顕彰も目立つことは先にみてきた通りである。

その横川と沖に次ぎ、個別の報道や顕彰が多く目にとまる班員が、光三である。それは新聞報道の数や、建碑建造物類、伝記刊行物類などでも同様の傾向にあった。光三に対する言及が他の班員たちと比べて多い理由としては、大

きく二点を指摘することができる。まず第一に、華族女学校の教員であった実父である浅岡一との関係である。光三に関する言及の特徴として、実父の浅岡にも合わせて触れる傾向を指摘できるが、その浅岡との関係から、常宮周宮の両内親王より光三（および浅岡家）が個別の弔意を受けたことが新聞では特に取り上げられ、それが家の名誉としても強調されていた。特別任務における戦死それ自体には、班員たちのあいだに価値の優劣があるわけではない。ただし光三の場合には、他の班員にはない、実父を介した皇族との繋がりが認められるからこそ、その分だけ話題性を持つ対象として報道されたのである。

しかしながら、光三に対する言及の多さを支えるものは、皇族との繋がりとという話題性だけではない。戦前期のみならず、戦後から現在にまで時間軸を広げてみた時、第二の理由として、出身校および学校関係者による顕彰や言及に注目することができる。光三が渡清する直前に属していた学校として、台湾協会学校に学んだことは先に述べたが、卒業を待たずに退学したとはいえ、同校の後輩たちによって光三個人の建碑が発案されていたことも確認した。この顕彰碑は、戦後まもなく地中に埋められたが、一九五五（昭和三〇）年四月には学生たちから復元の動きが起り再建され、一九八二（昭和五七）年一月に、拓殖大学八王子キャンパス（現八王子国際キャンパス）に移されて現在に至る。<sup>(34)</sup> また、同じく前記した拓殖招魂社には光三も祀られるが、現時においても春と秋の例祭が毎年開催されており、光三を含めた学校関係者たちへの追悼が継続的に行われている。さらに、学校関係者たちによる光三への言及としても、拓殖大学で講師を務めていた田中正明（一九一一—二〇〇六）による伝記や、<sup>(35)</sup> 光三の後輩にあたる宮澤正幸（一九三〇—二〇二四 五一期）による論文など、<sup>(36)</sup> 関係者や後輩たちによる論及も度々確認することができる。<sup>(37)</sup>

もちろん、光三以外の班員たちに対する追悼慰霊祭や個別の顕彰活動なども、戦後から現在に至るまで複数確認することはできる。例えば、班員各自の郷土で活動する遺族を含めた顕彰会による追悼会をはじめとして、銅像の再建、

論考や著作の発表および戦前期刊行物の復刊、企画展の開催などのほか、横川省三と沖楨介ゆかりの地である、岩手県和賀郡東和町（現花巻市）と長崎県平戸市のライオンズクラブが姉妹提携するなどの事例もある。<sup>(39)</sup>ただし、出身校の関係者たちによる定期的な顕彰や言及という点で考える時、光三に対する活動はひと際目立っている。<sup>(40)</sup>遺族や郷土における顕彰会という枠組みではなく、出身校の学校関係者たちによる定期的、継続的な追悼という点にこそ、光三に向けられた活動のもう一つの特色が認められるのである。

以上のことには、拓殖大学が持つ、学校としての特色も大きく関与しているであろう。前身の台湾協会学校は一九〇〇（明治三三）年九月、台湾に赴任する人材を養成するために設立された学校であり、その後は台湾以外の外地（朝鮮・中国・満洲ほか）にも対象を広げ、戦後においても海外への雄飛を建学の理念として再編し、現在にまで至っている。<sup>(41)</sup>

このような性格を有する学校である分だけ、日露戦争時において海外に雄飛して落命した光三は、途中で退学したとはいえ学校の理念を少なからず体現した人物として注目され、それに続かんとする後輩たちにとっては模範と仰ぐべき人物となる。例えば、光三と同学年であった星野桂吾（一八八〇—？）の文章に、次のような一節がある。「（……）北清事変直後、日露戦争直前の吾国運伸張の絶頂時に於て海外発展に志した茗荷谷健児の行末は恵まれ居り（……）唯々東亜経緯の大理想を夢みて一筋に支那へ支那へと憧れであった、此尖端を切つて卒業を待たずして飛出したのが第一回生の田中逸平君であり、吾々クラスの脇光三君であつたのです」<sup>(42)</sup>先に述べたように、日露戦争時に従軍および戦病死した学友は光三を含め七名を数えるが、そのうち特に光三が特別視されるのは、特別任務班という職務上の性格や、現地で囚われの身となり処刑されたという落命の仕方、その後に反復された新聞報道など、戦病死した他の学友たちにはないインパクトの大きさという点を指摘することができよう。そのため、学生たちのあいだから特に

光三を顕彰し、語り継ぐ動きが起こる事態は、一つの論理的な帰結であったとも考えられる。

光三と、他の班員たちとに向けられた動きを対照してみる時、活動や語りの母体とでも表現すべきものの違いを、そこには看取することができるであろう。

### おわりに

本論文では、日露戦争時に組織された特別任務班のうち、横川班に属した班員たちの報道や各種顕彰について確認し、なかでも脇光三をめぐる言説や顕彰の様子に注目してきた。班員のうち、班長であった横川や、横川と共に刑死した沖に関する言及が多いことは明らかであったが、その他四名のうちでは、特に光三に対する報道や顕彰が目立っていた。その光三に向けられた視線にも、実父である浅岡一を介した皇族との繋がりが、出身校関係者たちによる継続的な顕彰や語りなどが、他の班員たちと比べた時の特徴であった様子も確認することができた。

朝野を挙げての日露戦争という事態は、多くが民間の有志たちから編成された特別任務班と、その任務途上で殉職した横川班員たちとを烈士として表象、あるいは顕彰することとなり、その後も状況に応じて彼らは繰り返し喚起されていた。それは昭和に入り、特に満洲事変前後の戦時下において、烈士としての顕彰が増加する点に現れていたが、敗戦後の昭和戦後期には、彼らの追悼や顕彰が戦前期ほどの規模で行われることはなくなる。もちろん、遺族を含めた班員各自の郷土における顕彰会や、博物館における展示活動などは散見され、関連資料の発掘も折につけ報道されることがある。しかし遺族や郷土の顕彰会といった枠組みは、それを担う人々の高齢化や、世代の引継ぎがうまくなされない場合には、次第に先細りしていくことが一般的である。一方で、学校という枠組みにおいては、その組織が

存続し且つ理念や記憶を喪失しない限りにおいて、世代を超えた継承を見込むこともできる。その一つの事例として、脇光三に向けられた顕彰や語りがあるのだと捉えられるのである。

#### 〔付記〕

本論文は、「拓殖大学国際協力研究機構・国際日本文化研究所シンポジウム 日露戦争とは何だったのか——開戦一二〇年に問う——」（二〇二四年六月二九日）における発表、「日露戦争と脇光三」をもとに成稿したものである。当日は、国際日本文化研究所所長・丹羽文生教授や来場者から質問を頂戴した。それらへの応答も本論中には反映されている。ここにその旨を記し深謝申し上げる。

#### ■資料紹介・解題

ここでは本文中で言及した脇光三（以下、光三）に関する伝記、石橋貞幹『脇光三傳原稿』について、全文を翻刻して紹介する。まず著者である石橋貞幹の人物情報と『脇光三傳原稿』の書誌情報、そして資料価値について述べ、最後に該資料の収蔵経緯を記す。

著者の石橋貞幹は一八五六（安政三）年、二本松藩士・石橋貞勝の子として生まれた。幼名敬太郎。幼くして藩儒の堀六石（一八二二—一八九五）に漢籍を学び、市内の洋学塾である暁義社で洋学を修めた後、慶應義塾に入る。なお、一八七八（明治一一）年には漢学塾二松学舎の入学者名簿にも名前がみえることから、上京後にも漢学と洋学を兼修していたことがうかがえる。修学後は地元に戻り、二本松を始めとする複数の町村で助役を務め、一九一七（大正六）年には二本松町長となる。学校の新増築や災害および凶作への迅速な対策など、地域の発展に寄与した人物で



あった。一九二三（大正一二）年七月八日、六八歳で没する。著作に、『戸籍法大全』（一九〇一年）、『二本松町案内』（一九一一年）がある。<sup>(43)</sup>

次に、『脇光三傳原稿』（以下、「原稿」）の書誌情報について。「原稿」は、和紙でできた罫線用紙（青、半丁二行）が仮綴じ（右辺一箇所）された和装本である。墨付三五丁、一冊。縦二四・八糎、横一七糎。表紙は、「脇光三傳原稿」と墨書した和紙を二つ折りした簡素なもの。本文は墨書、うち三六から四〇箇所ほどに書き入れと朱筆がみえ、序に相当する丁には「明治四十一年六月」の年次が記載される。用字は、序相当部は漢字カタカナ交じり、本文部分は漢字ひらがな交じりを原則とする。構成は序相当部以下、「第一 光三の出生より脇氏を冒せし由来を記す」、「第二 光三養母を共に其生家浅岡氏ニ寄りし所以を記す」、「第三 忠勇の志念を發揮せし所以を記す」、「第四 一死國家に尽さんと思ひ立ちし事を記す」、「第五 死後の事に関する雑事を記す」からなる。それぞれの紙幅をみると、第一は一丁半、第二は三丁、第三は三丁半、第四は四丁、第五は二三丁ほどであり、特に死後に関して多くの筆を費やす。また本文中の特色として、青木宣純大佐から浅岡一宛の書簡と、佐々木幸見による祭文との両引用部分は、罫線の無い白紙に墨書されたものが挿入される（各三丁分）。なお、後者の祭文部分は宣命書きで記されている。

続いて、「原稿」の資料価値について。序相当部にあるように、「原稿」は光三の実父浅岡一と友人関係にあった石橋が、浅岡に依頼されて執筆したものである。先述の、青木宣純大佐から浅岡一宛の書簡や佐々木幸見による祭文、その他にも、中国哲学で著名な服部宇之吉（一八六七—一九三九）や、浅岡や光三と交際のあった河原操子（一八七五—一九四五）からの浅岡一宛書簡などが随所に引用され、また光三の兄弟、家人、友人たちからの聞き取りも活かされることから、特に光三の幼少期や家庭環境に関する記述は精細に富む。全編にわたって推敲の跡が看取され、これを底本とする刊行が企図されていたものと思われるが、ついに未刊行に終わっている。内容面は、光三の誕生と家庭・



生育環境から始まり、清国渡航後の特別任務と殉死、さらに死後の詳しい動向と葬儀の場面で攔筆され、光三の生涯が余すことなく描かれる。そのため「原稿」の筆致は、その後に言及される光三関係の記述に一つのひな型を提供していると思倣せる。宮原民平「烈士脇光三氏傳（烈士脇光三伝）」（『学友会報』第八二号、拓殖大学学友会、一九三〇年十二月）や、田中正明『落つる夕陽よしばらくとまれ』（拓殖大学、一九八三年三月）には、「原稿」の直接的な影響を見て取ることができる。

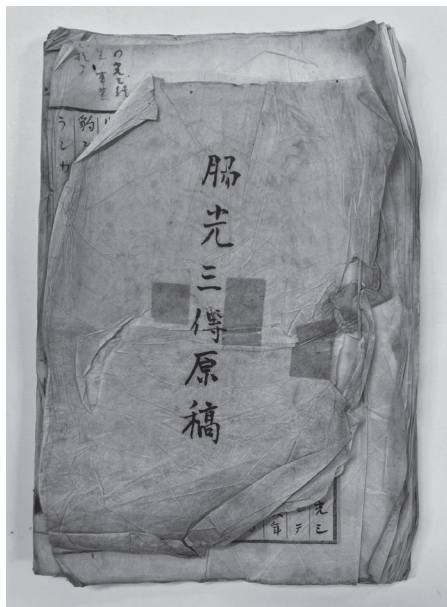
最後に、「原稿」の収蔵経緯についても触れておく。現在、「原稿」は拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室に収蔵されるが、それは田中正明氏（一九一―二〇〇六）の寄贈による。元々「原稿」は光三の兄浅岡次郎の次男である浅岡朝雄氏が所蔵していたものを、田中氏が伝記執筆に際して入手（借り受けまたは譲渡）されたという（田中氏前掲書、一二五頁）。この「原稿」を含み、伝記執筆で使用した資料類は、伝記刊行後に一括して拓殖大学図書館に寄贈されたと述べられ（田中氏前掲書、五八二頁）、その後の具体的経緯は不詳だが、現在では拓殖大学図書館に一括収蔵される。以下は推測ではあるが、伝記刊行後に大学図書館が資料類を預かり、一九九二（平成四）年、大学内に創立百周年記念事業準備委員会が、次いで一九九七（平成九）年に拓殖アーカイブズ事業室の前身である創立百年史編纂室が設置されて以降、いずれかの段階で当該資料類が移管され、現在に至ると考えられる。

#### 〔凡例〕

- 一 翻刻に際してできるだけ底本の体裁を残すことにし、文字表記についてもできるだけ底本の用字に従った。
- 一 丁表・丁裏の変わり目には、【一a】から【三十五b】を記載した。
- 一 底本に朱筆で記されている箇所は、太字ゴシックにして示した。

欄外の記載部分は、該当部分を網かけ  
にして示した。

■は抹消箇所を示し、○、△、取り消し線、右肩傍線は底本表記に従ったものを示すが、意図の不明な朱印や記号類は翻刻中より除いた。



〔本文〕

余カ畏友浅岡君<sup>マ</sup>一余ニ属シ君ノ第三子脇光三ノ傳ヲ作ラシメテ曰ク井戸川少佐余ニ東シテ光三ノ傳ヲ需ム光三年齒齡弱冠ヲ過ル僅ニ数年ノミ豈ニ紀スヘキノ事蹟有ランヤ強テ之レカ傳ヲ作ランカ只此レ有ルノミト青木大佐ノ書牘ト佐々木幸見氏ノ齋場ニ於ル祭文トヲ示サル余受テ之ヲ讀ミ節ヲ柏<sup>マ</sup>テ曰ク光三年少ナリト雖<sup>マ</sup>天下ノ志士ナリ何ソ紀スヘキ無シト謂ハンヤ即光三ノ兄弟及家人ト知友トニ質シ得ル所有リ数月ニシテ稿成リ一小冊ヲ爲ス。

光三終生ノ事業ニ於テ其全豹ヲ知ルヘカラサルモ亦以テ一班ヲ窺フニ足ランカ

【一a】

明治四十一年六月

石橋貞幹誌【一b】

脇光三傳

第一 光三の出生より脇氏を冒せし由来

を紀す

脇光三は浅岡一（福島縣旧二本松藩士にして其家世々三

百五十石を食む）氏の第三子なり浅岡氏明治十一年の頃職を文部省に奉し東京麹町區一番町 地に住せしに隣家に脇他三郎（滋賀縣旧彦根藩士にして世祿二百石の家の次男に生れ篤學を以て召されて弘道館文學教授に任せられ別に一家を爲せり）氏とて職を内務省に奉せし人ありき浅岡氏と相往来して交情殊に親密なりしが脇氏子無く浅岡氏當時二男

【一a】

子有りしかば其次子を養ひて嗣とせんことを望みしも浅岡氏の承引せさりし爲め其俤に打過きしに十三年に至りて浅岡氏の妻設楽氏妊身せしを以て脇氏夫妻は男子ならば此度こそ割愛せられよ抔と浅岡氏に請はれしが同年十二月一日光三生れ出てしにより脇氏夫妻は我が家に生れし如く喜びて哺乳時の外は懷にし去りて鍾愛啻ならざりしに小兒心にも隣家の夫妻を殆んと父母の如く慕ひしをもて脇氏夫妻は猶更に深き慈愛の心ももてなせしに生後一年八ヶ月を過ぎし折柄脇氏は福島縣属庶務課長として轉任するに至りし爲め携て赴任

【一b】

するを得は幸なり割愛せよとて切に請はれしに浅岡氏は最早母乳を廢するも發育に妨げなく脇氏夫妻の慈愛の深きを思ひ快諾したりしかは脇氏夫妻の喜び大方ならず十五年の六月初に福島縣に赴任せしといふ光三此時より脇氏の養嗣子として其姓を冒せり

## 第二 光三養母と共に其生家浅岡氏ニ

### 寄りし所以を紀す

其後脇氏は十六年八月に至り山形縣属庶務課長兼兵事課長に任せられ西置賜郡長及東田川郡長に轉し二十一年十二月更ニ廣島縣技師ニ任せられ二十五年六月病を得て職を辞し京都

### 【三a】

に移りて静養中二十六年九月病革り京都病院ニ於て歿す脇氏性質温厚篤實而メ氣概あり光三を愛すること實子も啻ならず常に知人朋友に誇て曰く孝子光三の如きは實子と雖亾殆ント見難し而メ前途有望なるも他の少年に譲らすと之を以て之を見れば光三幼時より人ニ異なる所ありしこと知るべし宿<sup>△</sup>志蹉跎顧<sup>△</sup>みて忤怩たらざるを得ず今

↓<sup>△</sup>他三郎氏京都ニ於て病革まりし時當時長野縣師範學校長として同地ニ在りし浅岡氏ニ打電し余命数盡ク後事を托したし乞ふ直ニ來れ浅岡氏驚き即日途ニ上り晝夜兼行氏を病院ニ訪ふ脇氏曰ク遠路の勞謝する所【三b】

を知らず余宿志蹉跎顧<sup>△</sup>みて忤怩たらざるヲ得す今五十四年を一期として永眠に就んとは曾て知るよしも無りき兄カ愛兒を請ひ得て今日ニ至れり今兒を兄に返へさんは甚た心易けれども其養母と共に之を兄ニ托せんは心苦しき限なれともされはとて如何とも爲難し兄願クハ母子の不幸を憐れみ以て撫育する所あれ兒の前途ニ就ては只兄能ク之を見よ云々浅岡氏之二答へて其邊の事に関しては心を勞する勿れ余決して君か遺托に背かず但シ今君を見るに大患なるは疑ふべくもあらずと虽<sup>■</sup>とも言語應答共に力あり何ソ命の旦夕に迫りし如き危急有ランヤ願クハ療養を怠る勿れ脇氏

### 【四a】

曰ク多謝、兄の疲勞想フベシ家ニ伯母と兄と留守せり

連二寢二就きて疲労を恢復せられたし余は安して眠二就くへしと眼を閉ちて復た言はず浅岡氏暫く側に在りしか安眠せし様なれば去て医室に入り脇氏の容態如何を問ひ試ミしに主治医曰ク脇君の病は動脈瘤にして今や其末期に遭逢せり殊ニ大動脈瘤にして手を下すに由なし明日にして破裂の不幸を見んか一週日の後ニ在らんか明言する能はず其破裂ニて即チ永眠ニ入るの期なれ云々浅岡氏此ニ於て脇氏の救ふべからざるを知り伯母を慰めんと思ひつゝ其家ニ至りしに伯母懇に氏を

【四b】

遇し寢所を設けて氏を促かし休息せしむ氏寢に就けとも睡る能はず五更の鐘を聞きすぬ程もあらせず何時の間ニ父の病床を訪ひけん光三来りて伯母と浅岡氏とに父の急を報して去る浅岡氏行きて見しに遺言せし時の様なりき脇氏の妻も看護婦も安らかに眠り居るものと思ひ居りしに夜半光三来り養父の容貌を熟視して其呼吸の様常に異なりとて医師の来診を求めしに医師来り見て昏睦<sup>ぐもく</sup>の状態ニ陥るならんといへしを以て光三は伯母と浅岡氏とに報

告せしなりき其後覺る折もなく曉け方近き頃終に永眠に就きぬ脇氏自分ら死期を測知し百里外

【五a】

に住せる浅岡氏を招きて後事を托し言終て永眠に就きし如きは常人の能くし難き所此事を以て推すも脇氏は尋常の人にあらすとは浅岡氏の常に口にする所なりといふ父の死せし時は光三氏十二年十月なりき浅岡氏は葬儀其他諸事營み終りて脇氏の遺族即後室薬師寺氏と光三とを帯同して長野に帰り脇氏の遺托の如くせしといふ

第三 忠勇の志念を發揮せし所以を記す

前にも説きし如く脇他三郎氏ハ温厚篤實にして氣概有りし人殊に藩政の頃篤學を以て拔擢せられ一藩の子弟教授の任に當りしこともあ

【五b】

れは家庭の教育も察知するを得べし其教訓も必光三の志氣を鼓舞せしもの有るはりしは疑ふべからず猶光三か養母と共に浅岡氏に寄りし時最初の程は其家に生れしを知らざりしか数日あならずしてこれを推知し兄弟の多きを

非常に喜ばれしといふ当時浅岡氏の母堂渡邊氏は齡八十歳なりしか必心身健全にして殆ント老嫗の態なく常に孫を集めて昔物語りを爲すを樂みとし明治戊辰の年。二本

松藩の士卒三百四十人が戦死せし當時の事を語り出て就

中光三の祖父静翁（通称段介名を利確と言ひ致仕シテ静

翁ト號す）■當時木十五歳ナリ）伯父與惣兵衛（名は

利恒四十二外祖父設東孫兵衛（四十二）外叔父花房直之

進同遠藤集之介祖母の姪渡辺新介（名小淵三十一）等一

家親戚の國事

【六a】

に斃れしこと又光三の父一氏も銃丸左手ニを貫きたりし  
事銃剣を負ひし時の事なる杯委しく語り出て説き聞かせ  
昔堅氣もて武士たる者の心掛ケ様杯説き聞かしすに付き  
て孫等を激励教戒せしを珍らしく樂しく思ひて兎角此物  
語りを爲す■■みとし聞かん事を望みし力は母堂も殊殊  
ニ光三を愛して幾回となく繰り返いし物語りして特に祖  
父静翁老人か六十五の頽齡且ツは致仕して静翁とさへ号  
し、身の當時藩主丹羽■丹羽侯より六十歳以上の老人は

婦女子と共ニ城地を去るべしと命令せしニも拘らす翁は  
余は運命を城と共ニせん此危急の秋に際して城地を去ら  
ん杯とは思ひもよらすと槍を提

【六b】

けて事に従ひてて戦死したる事此外老人にして同し心も  
て戦死せし者七八人ありしてと又伯父與惣兵衛は病身な  
りしも危急の場合に迫り△起て事に従ひ△搦手口を守り  
其持口の敗れんとせし時十字槍を揮て敵中に突入し潔  
よき戦死を遂げしこと杯涙と共ニ語り聞かし、度毎に光  
三は感奮して慷慨の態度を以て謹聽し何となく此行爲  
を羨やむ如く常に軍人たらしとする志厚かりしといふ二  
十六年十二月浅岡氏は華族女学校教授兼幹事ニ轉任し上  
京したるをもて光三も養母と共ニ東京に移れり幼時より  
養父母に従て福島山形廣島京都ニ移轉し又浅岡氏ニ従て  
長野より東京ニ移りしかは光三か小学の教科は山形廣島

【七a】



京都長野東京の五ヶ所に於てせざるを得ざりき東京に歸りて後明治二十七年麹町小学校ニ入り全科卒業の後上日本中学校ニ入学し三十三年（時ニ光三十九年四ヶ月）を以て日本中学を卒業し士官学校へ入学を出願せしも胸圍狹隘の故を以て体格検査ニ落第し爾後毎日寒水浴と器械体操とを怠らず殊ニ寒水浴は渡清後も猶廢せりき又柔術を嗜み折々は薩摩琵琶杯かなつることもありき琵琶は好みしのみ学ひたることゝてなかりき光三は士官学校ニ入学するを得ざりしかば更に臺灣協會学校に入り三十五年該校の清語教師たりし清國人賀梧桐帰國せんとするを聞き之れと謀り同年五月二十

【七b】

八日東京を發して清國北京ニ遊学せり是よりさき光三淺岡氏に隨て東京ニ移りし翌二十七年養母藥師寺氏腦溢血症■にて半身不随となり赤十字社病院内科部長岩井禎藏氏の治療を受け居りしか主二十九年十月七日終に永眠に就きぬ光三此間力を尽して看護し晝夜怠らざりき養母の歿せし折其近親にて家政不如意のもの有りしを光三殊に

同情を表し母の遺所衣服夜具其他の雜品に至るまで之を其人に贈らんことを淺岡氏に請ひしかは氏は御身の所有物なれば固より御身の心の俤にせられよと快諾を與へしかは光三之を喜び其時ニ於て父母の遺品の内自身の用ふべき書籍文房具の

【八a】

外は悉く之を父母の親戚に分ち與へしといふこれ等の事のみにもあらざるべけれど光三は養父母の親戚故旧よりも畏敬の心もて迎ひられき△

第四——死國家に尽さんと思ひ立ちし事

を紀す

△清國に船航して先づ北京に至り東文学社に入り日本語を彼國人に教へ自分は清語を研究することを怠らざりき其後東文学社に何事のありしかは知らねと沖禎介其他十士三名の人々と共に退社して後光三は同志者中山直熊と共に北支那毎日新聞社に入り操觚の事に従へりといふ

紀者曰く光三北京に行きてより新聞社

【八b】

に入りし間の消息は紀者之を詳にせず故に記するに  
本まことなし由なし知人の補増補を乞ふ

#### 第四 一死國家に尽さんと思ひ立ちし事

を紀す

三十七年の一月書を浅岡氏に寄せてぬ其意日露の國交  
時々時刻々に危殆の情況となれりを呈せり若し緩急有ら  
は國家の爲め心力を尽したく随而は萬死の間に出入せん  
覚悟なれば豫て御諄許容を得置度といふにありき浅岡氏  
は國民としてたも有るへき心掛けなり志望の如くすべし  
但し輕舉妄動は慎むべきこと勿論なりと申送りしと聞く  
其後同年二月北支那毎日新聞紙上脇華堂の名を

【九 a】

以て中山直熊氏と共ニ清國漫漫遊の廣告を掲げ飄然去て  
行く所を知らざりしといふ之と同時に浅岡氏の許へも写  
真を送り越せしと聞くいふ猶數日を経て北京大学堂に招  
聘せられ居る脇■迎服部博士（■字之吉）氏より浅岡氏  
に一書を寄せらる其文二曰く

拝啓爾後御無音多罪然は御令息脇光三殿四五日前突  
然天津より御上京今度其筋の内命により満洲地方に  
向ふ旨御話有之一度は其名譽の大なるを喜び一度は  
其任務の至難にして生命を賭するにあるを憂ひ候が  
事已に定まり候後のことゝて外に申様も無之只其百  
難を忍ひて成功されんことを祈

【九 b】

り候昨夜數名の日本人と共に出發されたる■筈に候  
秘密に属しる候事故今明言するを得ず光三殿も亦小  
生にも明言されず候大体は小生承知いたし居候他日  
機を見て詳に可申上候御來訪之際序に家の方へよ  
ろしくと申され候が至て元氣にて氏此■千載一遇  
の時■に至大の任に當るは君國に報する無上の快  
事なりとて勇みて語られ意氣勇壯二有之候不取敢右  
申上置候麻布丹羽家へは長徳様まで其大要申上候様  
家使へ申遣し置候其他に御内は内密にする様申入置  
候小生只管無事成

【十 a】



功を祈り候

二月二十一日 服部宇之吉

浅岡老臺

浅岡氏は此書管<sup>ママ</sup>を読みて母堂に此事を語り聞かし、に母堂は涙を流して喜び男の子は斯くてこそよけれどと他は言はさりしといふ其後蒙古カラチン<sup>ママ</sup>園王府の家庭教師として招聘せられ居たりし河原操女子史（信州松本の人にて曾て同縣女子師範学校に入り成績科創設ノ際入学して卒業し後高等師範学校に入り成績優等良なりしか病にかゝり退学して療養し健康に復し支那清國上海にの女学校<sup>ママ</sup>二教鞭を執り轉して蒙古に入る日露

【十b】

構兵のこと有りし以来男子にもまして心力を尽したる女丈夫なり）より三月二日附の書浅岡氏に達せり其文に曰く

大いそはきにて一筆申上候<sup>ママ</sup>今度圖らず光三様二御目に懸り誠にうれしく覚え申候<sup>ママ</sup>曩日には上海城内にて次郎様に御目二かゝり今又かゝる蛮境にて其御令

弟様にとは皆様に深き御縁の御座候ものと不思議に存候位に御座候光三様今度の御仕事は實に浦山敷存候私も男子ならば此御一行に加へて戴き度候にと残念に存せられ申候多分明日中に當地を御出發の

【十一a】

こと、存候得共一行皆様殊に光三様にはよう支那人に御化け成され候御訪子載ね戴き候折きたなき服にて失禮と仰せられ候ま、ま其御心にては未だ支那人として十分ならず今一層垢つきてかゝる光る位に成り又半風子とかいふ虫でも御捕り成さる様になれはよろしきよし申上候ひしに今一週間も立んには必虫も見らるべしと仰せられ大笑いたし申候北京御出發は後は非常に御身体の御工合よろしき由仰せられ御血氣色も御よろしく渡らせられ候ま、御安心遊はされ度候丁度手製の靴下

【十一b】

と手袋と御座候ま、ひゞあかきりのきれ玉はぬ様にと存し御持参を願ひ候御一行は此地にて一切御支度成され候爲メ私は御手傳にて甚た忙はしく御座候申上度事山山御座候得共北京ニ便を出し候ま、何もく後便にと存し取り急き用事のみ一筆はしりかきのま、申上候皆、様ニ呉、もよろしく御願申上候時節柄御自愛專一に存上候恐入候得共別封下田先生へ御願申上候

三月二日

河原操子

浅岡先生

人々御中

とあり此封中に父に宛たる光三の書と兄次郎

【十二a】

に宛たる韻文とあり曰く

一朝宣戰、除百年憂、吾党有烈士

死賛<sup>ママ</sup>「皇猷」興安西峙 松華東流

俠骨可埋 此山河頭

次郎兄上様

光三拜

父に宛てたる書は途中にて河原女史を訪ひたるを報せしのみ後にて思ひ合すればこれそ光三の絶筆なりきしなり

第五 死後の事に関する雑事を紀す

明治三十七年四月末より五月六月に涉りて殉難志士の名世上ニ喧傳し先づ横川省三冲禎介二氏の紀事現はれ中山直熊脇光三二氏の事之に次ぎ松崎

【十二b】

保一田村一三二氏の事又之ニ次きて傳へらるゝに至れり當時高輪御殿に在します常宮周宮内親王殿下には日露開戦以来戦死者名簿を御調製遊はせられ御躬自ら官姓名を御記入あらせられ且つ畏<sup>ママ</sup>しくも御親祭をも遊はせられしと承り及びしが横川冲を始メ其他中山脇松崎田村の六士をも御記入あらせられ其姓氏に冠するに忠君愛國之志士の七字を以てせられ他の將士と共に御親祭遊はされし由に承りぬ光三の死を聞こし召されし折華族女学校教授兼学監常宮周宮内殿下御用掛り下田歌子女史浅岡氏を訪はれ常宮周宮内殿下には光三の壮舉を聞こしめされ「困

難の事に従ひ君國の爲めに尽せし眞真心

【十三 a】

の健氣けなけさよ其父母の心の内も思ひやらるゝ厚く慰めてよ」  
との御言葉を蒙れりと傳へられ且ツ是は皇后陛下より兩  
殿下へ賜はりし御菓子なるを更に兩殿下より賜はるるを  
傳へられ猶写真もあらは御覽遊はされ度思召なりと添て  
傳へられしがは浅岡マ氏は思召の有り難きに感泣し翌朝高  
輪御殿へ伺候して兩殿下の御養育掛り佐々木伯爵に頼り  
て御札を申上且ツ写真（六士を一枚ニ写せしもの）を捧  
けしに恐れ多くも此時御学問所に於て戦争中負傷せし者  
の爲めにとて御手つかから細帯を御製作遊はせられし御場  
合にも拘らず直に拝謁仰せ付けられ伯爵及同夫人に導か  
れて御前に拝伏せしに「此度のことと

【十三 b】

……察し入る」と仰せられし様に承りたれとも恐懼無涯  
夢中なりし様覺ゆと且つ御声の静なりし故明かに耳に留

まら■さりしと浅岡氏は人に語られき

當時光三の絶筆を聞きて御歌所長高崎清風老人は

かたみにとつみておくりし唐草に

大和心の花そにほへる

を■と色紙に書るし、を自ら浅岡氏を訪■はつれて寄せ  
られしと又下田歌子女史は

國の爲めと思ひたえてもたらちねの

みおやのもりのふなけきをそ思ふ

と書るして贈られしと又衆議院議員安部井

【十四 a】

磐根老人は旧同藩士の好もあり浅岡氏を知れるものから

すくく〜と千里かけります■ら雄の心の駒の

いたさまじきかな

ことしあらば火をもふまんと思ひりし

心のあとも見ゆる道かな

あまかしたたれか仰かぬ國のため

われとくたけたまの光りを

と出するして三葉の短冊を郵送せりと又當時淺岡氏の同僚なりし碩儒土屋

鳳洲老人は一詩を淺岡氏ニ寄せられたり曰ク

悼脇光三

雪虐風饕幾苦辛、丹心許レ國風忘レ身興

【十四b】

安嶺月松江水、照<sub>二</sub>得忠肝<sub>一</sub>萬古新

又碩儒淺岡氏の先輩竹内東仙老人も一詩を淺岡氏に寄す曰ク

蹶然投<sub>レ</sub>筆起、死以賛<sub>二</sub>皇猷<sub>一</sub>、名與<sub>二</sub>山河<sub>一</sub>久、興安松華

頭

又帝國教育會長辻新次信松老人は光三辞世詞の韵を用て六士を吊せられ たり曰ク

次脇光三辞世韵弔氏及横川省三冲楨介

松崎保一田中村一三中山直熊五士

忠君愛國士常宮周宮兩内親王殿下祭六士靈冠其姓氏忠君愛國之志十七字云故及 先<sub>二</sub>天下憂<sub>一</sub>憂夙有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>畫

策<sub>一</sub>、一死賛<sub>二</sub>皇猷<sub>一</sub>。壮烈鬼神哭、遺芳百世流 雨寒華

水岸、雲暗興山頭

此他諸方より淺岡氏に寄せられたる詩歌殆ント算すべから  
【十五a】

ず此ニ其數篇を紀するのみさても六士の事は横川沖二氏を始め其他の四士ともに空しき人の數に入りしとは其親戚は勿論世人も斯く信し新聞紙杯にては目ニ見し如く書き載せたれとも其筋に伺ひ出てしに生死不明といふ事にて三十九年四月までは打過きたりしに同月二十七日滿州軍總司令部殘務員井口陸軍少將より淺岡氏に宛て光三が明治三十七年四月十五日「クローンホ」に於て戰死せし旨を報し同時に光三か出發前北京に於て青木大佐に托せし遺髪を送付せられ同時ニ陸軍省より淺岡氏に左の辞令を下附せられぬ

淺岡 一 【十五b】

故陸軍通譯脇光三明治三十七八年戰役ノ功ニ依リ特ニ金千百円ヲ賜フ

明治三十九年四月廿七日 陸軍省

其後五日に至り命を奉して帰朝せし北京公使館附武官大佐青木宣純氏（今日の青木少將なり）左の書を浅岡氏ニ寄せて同氏を慰藉し猶兩國<sup>マ</sup>回同氏を其邸に訪はれ特別任務に就きし人々の性行及切功績等を物語られたりしと其寄せられし書は

【十六a】

＊【十六b】は白紙。次の丁から別途和紙挿し込み。

#### 末號參考書

拝啓薄暑ノ御益御清康奉欣賀候扱故脇光三君御殉難之御事蹟ニ付テハ疾ニ御報導可致苦ノ處其任務軍國ノ要機ニ関シ遽ニ發表シ難キ事情モ有之乍遺憾今日迄差控居候然ルニ平和克復ノ今日愈名譽ノ戦死者トシテ公然發表モ有之候ニ付此時期ニ於テ同君殉國ノ顛末左ニ開陳仕候

明治三十七年一月二月ノ交日露ノ國交將ニ破レントスル時ニ候ヒキ北京ニ於テ特別任務班ノ組織セラル、ヤ故光三君ハ他ノ有志諸君ト共ニ慨然奮起盟テ王事ニ盡サントノ

熱誠ヲ以テ進テ命ヲ奉シ殊ニ困難ナル任務ノ配當ヲ受ケ

【十七a】

ラレ横川省三、沖楨介、松崎保一、中山直熊、田村一三等ノ烈士諸君ト共ニ諸種ノ準備ヲ整エ二月中旬奮然北京ヲ發シ朔北ノ野ニ向ヒ御潜行相成候時恰モ嚴冬ニ際シ祁寒骨ヲ砭シ積雪脛ヲ没シ天地暗澹滿目荒寥ノ境ニ出沒サレ飢渴ヲ忍ヒ百難ヲ排シテノ御行動困難ノ状察スルニ餘アリ候斯クテ五十餘日内外蒙古ヲ横断シテ四月十二日杜爾齋哈停車場附近ニ到着セラレ此ニ根據ヲ構エ將ニ預定ノ壯舉ニ着手サレントスル折柄不幸敵國巡邏兵ノ物色スル所トナリ横川、沖ノ両君ハ敵手ニ陥リ後チ哈爾賓ニ送ラレ軍法會議ノ審案ヲ經テ從容義ニ就カレ爾<sup>マ</sup>

【十七b】

他ノ諸君ハ辛フシテ厄ヲ免カレ再舉ヲ図ラントセラル、内四月十四五日頃敵ノ教唆ヲ受ケタル貪慾無智ノ蒙民ノ爲メ非命ヲ遂ケラレタルモノ、如シ是ハ當時該地方ニ行

商セシ支那人ノ報スル處ニシテ信ヲ措クニ足ルモノニ有

於東京

【十八b】

之候書シテ此ニ至レハ悲憤滿腔血沸キ肉躍ルヲ覺工御遺族方ノ御痛恨諒察ニ堪エズ候左ハアレ諸君ノ此ノ如キ壯

陸軍砲兵大佐青木宣純

舉ニ依リ敵軍ヲシテ全戰役間貝加爾逸<sup>ベガル</sup>東鉄道ノ掩護ニ歩騎兵各五十餘中隊ヲ常置シ爲メニ第一線ノ兵力ヲ減殺セシメタルハ顯著ナル事實ニシテ我軍ノ全作戦上ニ至大ノ貢獻ヲ致サレタル義ニ有之候是ニ

【十八a】

浅岡 一殿

追テ本文ハ新聞雜誌等ニ顯ハレサル様特ニ御注意被下度又烈士諸君ノ御功績ニ對シテハ不日行賞ノ御沙汰有之義ト存候御承知被下度候

【十九a】

依リ烈士諸君ノ英靈モ幾分満足サレアル事ト信シ竊ニ慰藉罷在候然レ枉諸君遺烈ノ及フ所ハ更ニ大ナルモノ有之

\*【十九b】は白紙。ここまでで和紙挿し込み終わり。

其純正ナル忠節其凜乎タル義烈ハ所謂大和魂ノ精華ニシテ千載ノ下猶懦夫ヲ起タシムルニ足ルモノニ有之明治聖代ノ歴史ニ一大光彩ヲ放タレタルモノト確信仕候御遺族方ニ於テモ此邊御洞察ノ上幾分御安慰被下候ハ、仕合ト奉存候先ハ烈士諸君殉難ノ次第御報申上度特ニ奉得貴意候敬具

右の如く光三の死も既に明かに成りたれば浅岡氏は此用ゆ月の を以て光三の爲めに葬儀を執り行ひぬ其時權大教正佐々木幸見氏カ斎場に於て讀まれたりし祭文は光三の小傳とも見るを得へきものなれば此に掲けぬ其文に曰ク

【二十a】

明治三十九年五月

依命帰朝中

\*【二十b】は白紙。次の丁から別途和紙挿し込み。

地號參考書

是乃齋場コレハユニハシ暫昇据安奉シバシカキスヘヤスマツ脇光三命脇ノミコト及淺岡小四郎命ノミコト  
 板前イハハシ齋主權大教正佐々木幸見拜母イハハシノミコト白コハロフ今此齋場コノユニハシ之ノ仕奉シタマフ留祭典マツリノイハヒ汝命等ニツミタチノイハヒ現世乃永別イマノヨノトキニハナレバ現身乃終大御式イマノミナリノハナレバ  
 之有且々ノハナレバ一世乃事蹟イツノミナリノコト称忍イハヒ宣白ノリヲクハス安波禮脇光三命アハレハシノミコト正五位勲五等淺岡一大人サマノミコト乃三男ノミナリノミコト明治十三年十二月一日メイジノミナリノミコト生

出給イデ幼時脇他三郎主コトノミナリノミコト養イハヒ十四年シヨウシヨウ時他三郎主身退オキタチノミナリノミコト給イデ之後其家乃名受繼ノミナリノミコト養母共イハヒ淺岡家生長給オキタチノミナリノミコト素智ソチノミナリノミコト賢サカシノミナリノミコト  
 久直キナナ正性セイセイ質乃シツノミナリノミコト隨父母君等スヅカフツノミナリノミコト事孝心厚コトノミナリノミコト兄弟等ケイテイノミナリノミコト睦ムツノミナリノミコト親サカシノミナリノミコト常トキトキ文學乃道ガクノミナリノミコト武夫乃武業ブツノミナリノミコト好柔術イハヒノミナリノミコト云術修イハヒノミナリノミコト又薩摩サツマノミナリノミコト琵琶

【二十一 a】

琵琶ヒナバ嗜美シビ給比之聞奉イハヒノミナリノミコト其學校マナヒヤノミナリノミコト坐之々イハヒノミナリノミコト麴町小學校日本中學校乃業卒給ノミナリノミコト始ハジメ台灣協會學校タイワンケイガクノミナリノミコト在留事二年ノミナリノミコト明治三十五年五月支那國北京シナノミナリノミコト至東文學社トウモンガクノミナリノミコト在彼國人ノミナリノミコト日本言葉教ニッポンノミナリノミコト又自彼國語學コノミナリノミコト給比斯後北支那每日新聞社ノミナリノミコト在里文書業勞給ノミナリノミコト比之同三十七年ノミナリノミコト乃初我國露西里國交乃事ノミナリノミコト絶

爲時北京ノミナリノミコト之特別任務班ノミナリノミコト乃設介里ノミナリノミコト橫川省三沖禎介主始ノミナリノミコト  
 同心人等乃共ノミナリノミコト銀太刀伊豆敏心ノミナリノミコト振起ノミナリノミコト健進ノミナリノミコト其列加里ノミナリノミコト  
 仕隨重ノミナリノミコト職負持ノミナリノミコト同年二月中旬北京ノミナリノミコト出發ノミナリノミコト之北方指ノミナリノミコト之ノ進ノミナリノミコト行坐ノミナリノミコト留ノミナリノミコト折ノミナリノミコト冬ノミナリノミコト乃空有ノミナリノミコト降ノミナリノミコト里ノミナリノミコト久雪ノミナリノミコト脛ノミナリノミコト埋ノミナリノミコト膚ノミナリノミコト

【二十一 b】

水留寒物ノミナリノミコト爲受波野乃中山乃嶺人里遠ノミナリノミコト谷間起臥爲志或波ノミナリノミコト  
 飢渴苦ノミナリノミコト堪烈寒ノミナリノミコト凌ノミナリノミコト百千乃辛苦ノミナリノミコト耐忍ノミナリノミコト我大君乃御爲ノミナリノミコト  
 國爲身ノミナリノミコト棚知盡ノミナリノミコト遂虎伏野邊乃露刀敢無久消ノミナリノミコト身失給ノミナリノミコト  
 比之同年四月十四日五日乃頃ノミナリノミコト又淺岡小四郎命光三命乃弟ノミナリノミコト  
 御父一大人乃四男坐之ノミナリノミコト明治十六年九月十二日ノミナリノミコト生出給ノミナリノミコト  
 比之性質ノミナリノミコト猛雄々ノミナリノミコト之久細事ノミナリノミコト御心寄給ノミナリノミコト常ノミナリノミコト嚴大ノミナリノミコト事業ノミナリノミコト  
 御力盡ノミナリノミコト心構坐ノミナリノミコト氣ノミナリノミコト御齡二十年ノミナリノミコト時報效義會入海軍大尉郡司成忠主等刀協其事勞ノミナリノミコト北海遙々ノミナリノミコト伊往涉ノミナリノミコト之何吳謀基知給ノミナリノミコト比之事有里ノミナリノミコト其後遠洋漁業刀

【二十二 a】

云事乃筋力專力盡ノミナリノミコト思比定先支那國行交ノミナリノミコト比海路涉ノミナリノミコト留事乃業學比修ノミナリノミコト究刀其事業勉ノミナリノミコト勵ノミナリノミコト坐之々ノミナリノミコト遂病乃爲清國太



沾病院<sup>ル</sup>之身退<sup>リ</sup>給<sup>ビ</sup>去<sup>リ</sup>之<sup>イニ</sup>三十八年九月八日<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>安波礼汝<sup>ル</sup>

汝命<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>何<sup>ル</sup>

【二十三 a】

命等<sup>ル</sup>麻太三十年<sup>ル</sup>滿敢<sup>ル</sup>御齡<sup>ル</sup>之其思慮<sup>ル</sup>大凡人<sup>ル</sup>立勝<sup>ル</sup>礼坐<sup>ル</sup>奴礼<sup>ル</sup>  
今後<sup>ル</sup>國爲<sup>ル</sup>世乃爲<sup>ル</sup>大利益<sup>ル</sup>起<sup>ル</sup>高功績<sup>ル</sup>建給<sup>ル</sup>波<sup>ル</sup>可<sup>ル</sup>惜<sup>ル</sup>

手<sup>ル</sup>歎<sup>ル</sup>奉<sup>ル</sup>何<sup>ル</sup>加<sup>ル</sup>悲<sup>ル</sup>奉<sup>ル</sup>故汝命<sup>ル</sup>等<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>冥大神<sup>ル</sup>乞<sup>ル</sup>祈奉<sup>ル</sup>靈<sup>ル</sup>

短<sup>ル</sup>伎<sup>ル</sup>一世<sup>ル</sup>現身<sup>ル</sup>限身<sup>ル</sup>限身<sup>ル</sup>身失給<sup>ル</sup>波<sup>ル</sup>惜<sup>ル</sup>云<sup>ル</sup>悔<sup>ル</sup>之云<sup>ル</sup>中々<sup>ル</sup>奈抑<sup>ル</sup>

斎<sup>ル</sup>比<sup>ル</sup>鎮<sup>ル</sup>柩<sup>ル</sup>今<sup>ル</sup>大<sup>ル</sup>把<sup>ル</sup>底深<sup>ル</sup>久<sup>ル</sup>埋<sup>ル</sup>奉<sup>ル</sup>依<sup>ル</sup>式<sup>ル</sup>隨<sup>ル</sup>々<sup>ル</sup>如此<sup>ル</sup>仕奉<sup>ル</sup>里<sup>ル</sup>礼<sup>ル</sup>

病<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>身失<sup>ル</sup>波<sup>ル</sup>現身<sup>ル</sup>乃爲<sup>ル</sup>慣<sup>ル</sup>之爲<sup>ル</sup>幸<sup>ル</sup>術無<sup>ル</sup>事<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>礼<sup>ル</sup>國<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>世<sup>ル</sup>乃爲<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>

代<sup>ル</sup>御餐<sup>ル</sup>物等<sup>ル</sup>棒<sup>ル</sup>供<sup>ル</sup>廣<sup>ル</sup>厚<sup>ル</sup>治<sup>ル</sup>奉<sup>ル</sup>天<sup>ル</sup>翔<sup>ル</sup>寄<sup>ル</sup>來<sup>ル</sup>會<sup>ル</sup>坐<sup>ル</sup>神靈<sup>ル</sup>

後世<sup>ル</sup>掛<sup>ル</sup>可<sup>ル</sup>惜<sup>ル</sup>益良武夫<sup>ル</sup>久<sup>ル</sup>那多夫<sup>ル</sup>礼媿<sup>ル</sup>醜女<sup>ル</sup>伎<sup>ル</sup>奴輩<sup>ル</sup>乃爲<sup>ル</sup>

等<sup>ル</sup>相諾<sup>ル</sup>聞<sup>ル</sup>食<sup>ル</sup>刀<sup>ル</sup>畏<sup>ル</sup>拜<sup>ル</sup>美<sup>ル</sup>白<sup>ル</sup>須<sup>ル</sup>

【二十三 b】

身失給<sup>ル</sup>波<sup>ル</sup>誠<sup>ル</sup>口惜<sup>ル</sup>久<sup>ル</sup>憤<sup>ル</sup>極<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>留<sup>ル</sup>然<sup>ル</sup>

【二十二 b】

波<sup>ル</sup>マウセト<sup>ル</sup>虽申<sup>ル</sup>光三<sup>ル</sup>命<sup>ル</sup>我身<sup>ル</sup>兼<sup>ル</sup>無<sup>ル</sup>物<sup>ル</sup>君<sup>ル</sup>尔<sup>ル</sup>棒<sup>ル</sup>國<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>生<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>限<sup>ル</sup>盡<sup>ル</sup>佐<sup>ル</sup>

と佐々木氏の讀まれたるに多数の命葬者をして袖を■潤

思<sup>ル</sup>比<sup>ル</sup>定<sup>ル</sup>坐<sup>ル</sup>之<sup>ル</sup>事<sup>ル</sup>波<sup>ル</sup>彼蒙古國<sup>ル</sup>喀喇泌王<sup>ル</sup>府<sup>ル</sup>兄<sup>ル</sup>刀<sup>ル</sup>坐<sup>ル</sup>須<sup>ル</sup>淺岡次郎主<sup>ル</sup>

さしめ且つ其葬儀は三男と四男とを併せての事なれば浅

贈寄<sup>ル</sup>世<sup>ル</sup>比<sup>ル</sup>之<sup>ル</sup>詩<sup>ル</sup>

山の墓地に光三小四郎の遺髪と遺骨とを埋めたりき

一朝<sup>ル</sup>宣<sup>ル</sup>戰<sup>ル</sup>、除<sup>ル</sup>二百年<sup>ル</sup>憂<sup>ル</sup>、吾党<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>レ士<sup>ル</sup>、死<sup>ル</sup>賛<sup>ル</sup>二

又同じ出月の末北京なる青木大佐より浅岡氏に宛て忠魂

皇猷<sup>ル</sup>、興安西峙、松華東流、俠骨<sup>ル</sup>可<sup>ル</sup>埋<sup>ル</sup>、此山河

碑の写真と共に左の書状を寄せられぬ曰ク

頭<sup>ル</sup>、

拜啓陳は陸軍通譯脇光三殿今回ノ戦役に於て御尽忠

刀<sup>ル</sup>詠<sup>ル</sup>美<sup>ル</sup>給<sup>ル</sup>比<sup>ル</sup>之<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>御心<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>内<sup>ル</sup>曾<sup>ル</sup>思<sup>ル</sup>比<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>此<sup>ル</sup>即<sup>ル</sup>光三<sup>ル</sup>命<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>現身<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>終<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>水

有之候段邦家の為め謝すべく敬すべく又國民の本分

莖<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>刀<sup>ル</sup>開<sup>ル</sup>奉<sup>ル</sup>安波礼<sup>ル</sup>如此<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>状<sup>ル</sup>波<sup>ル</sup>軍人<sup>ル</sup>等<sup>ル</sup>我<sup>ル</sup>戰<sup>ル</sup>場<sup>ル</sup>之<sup>ル</sup>身<sup>ル</sup>失<sup>ル</sup>比<sup>ル</sup>留<sup>ル</sup>

として名譽此上なき次第には有之候得共思へは又悲

劣<sup>ル</sup>良<sup>ル</sup>行<sup>ル</sup>爲<sup>ル</sup>之<sup>ル</sup>誠<sup>ル</sup>日本<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>大和嶋根<sup>ル</sup>益良夫<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>龜鑑<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>称<sup>ル</sup>津<sup>ル</sup>信<sup>ル</sup>其<sup>ル</sup>勲<sup>ル</sup>功<sup>ル</sup>毛

【二十四 a】

少<sup>ル</sup>奴<sup>ル</sup>加<sup>ル</sup>其<sup>ル</sup>御名<sup>ル</sup>國<sup>ル</sup>史<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>乃<sup>ル</sup>後世<sup>ル</sup>遠<sup>ル</sup>人<sup>ル</sup>皆<sup>ル</sup>称<sup>ル</sup>仰<sup>ル</sup>奉<sup>ル</sup>事<sup>ル</sup>思<sup>ル</sup>開<sup>ル</sup>今<sup>ル</sup>

■■■■痛痛哀悼の念禁し難きもの有之候既に小生に於てすら然り貴下に於ては定めし此念の切なるもの有之事と信し誠に御同情の至りに堪へず候就ては今回戦役の終了を期トシとし我か公使館内に忠魂碑を建て別冊記事の如く他の八名の戦死者をも合祀し去る四月十七日一大祭典を施行仕候間御了承有之度先は改めて御悔み旁祭典當日撮影の写真二葉相添す此段御通知申上候勿々頓首

明治三十九年五月十五日

東清國北京陸軍砲兵大佐

【二十四b】

青木宣純

浅岡 一殿

是れより先光三に對する陸軍省よりの辞令書ハ北京公使館にて預り置かれしを浅岡氏の許に送付せられぬ ■■■蓋し特別任務班を組織せられし木氏の遺族へも一行の遺族へも同様送付せられしといふ

脇 光 三

陸軍通譯ヲ命ス

奏任官待遇月俸八拾円ヲ給ス

明治三十七年二月十五日

陸軍省印

【二十五a】

陸軍通譯脇光三

大本營附ヲ命ス

明治三十七年二月十五日

陸軍省印

陸軍通譯脇 光三

大本營附ヲ免シ滿洲軍總司令部附ヲ命ス

明治三十七年七月七日

陸軍省印

【二十五b】

右の辞令書杯北京より送附せられし後の事なりき長野縣人吉原某（これ亦当时志士として特別任務を帯ひ他の方面ニ於て六士の如く行動せし人にて六士と同時ニ北京を出て興安山脈中の某地点ニ於て六士と分れたりといふ）浅岡氏を訪つて六士の事に関し談話せし事次中自分等横川氏の一行と分れんとせし時豪膽彼か如き横川氏自分等を顧ミ涙数種行して曰ク諸君と相見るも今を限りなればし願くは各自自重して事を爲し男兒の志に酬ゆべしと流石に名残惜しき様なりしかば自分等は之を慰めて思ひの俣に任務を執行して愉快の再会を為さんと答へしに横川氏はそは六ヶしき望なり若し

【二十六a】

さることもあらは望外の快事なりといひて別れたり又脇君と共に河原操女史を「カラチン」王府に訪ひし時君が書翰を書きて筆を擱くことの晩かりし故疾くせよと促したるに「否とよこれそ書牘の書きおさめなるべし」とて猶數行を書かれたりき二君ともに其言の讖となりしそ是非な

けれと語られき猶吉原氏は語を續きて横川を始め吾党志士は我か日本國か露國を敵として戦ふは固より容易の事にあらず國人舉て敵慨の心を以て奮奮て事に當らざるべからず我党は嘗て書を読み事理を解さずる者率先事に従ひ大に同胞を鼓舞し國家をして終局の目的を達せしめざるべからず吾党当時の意氣此の

【二十六b】

如くにして眼中艱難なく嶮阻なく死生なく存亡なく毀譽なく褒貶なく只常人の爲し難きを爲して國家に貢獻せんと期せしのみされは位置の如何待遇の如何等は吾党の間ふ所にあらざりき云々

又当时横川省三の母浅岡氏を訪つて左の談話をせられき内田全權公使自分方を訪つれられしかは四方八方の談話の中に自分は内田公使に對し倅省三力在京（在東京）中國事の爲めに奔走せる人々なりとして往來せし者も少からざりしに先般事を共にせし人々の中に其人は一人もなく皆自分の嘗て聞きし事もなく且ツ省三に比ぶれば

皆年若き人■々のみの様に思はる此等の方々と行動を共にせしは其筋の御命令を受けて

【二十七a】

爲■し、事にもやと問ひたりしに内田公使はさればなり命令といへは命令に相違なきも此人々は皆横川君か指名して行動を共にせんことを望まれたるにより官府は其言の如くせしなり此事これに關しては一條の道理もあることなり元來此特別任務班を組織せられんとせし時其内容より見れば官吏あり軍人有り書生有り種々様々の人物をもて組織すること、なりき横川君は學識も有り経験もあり年齢も多く世故に長けたる方なれば君を一方の首領として事に当らしめんには其一行の人撰は君に一任する方然るべしと評議一決せしかは同行者を君に撰ましめしに日頃君の信頼する人々を君自ら撰

【二十七b】

みて此人々を望まれし故さてこそ他の五名の人々は君と

行動を共にせしなれ然るに事意の如くならず六人共に全滅に歸せしは一大恨事なりと公使は潜然として涙を流されぬと母堂は語りて嘆息し省三か撰みたればこそ他の五人の方々をば空しく野末の露とはなしぬ傷ましき事の限りにしてまた氣の毒の情に堪へずと母堂は繰り返へし繰り返へし涙なからに嘆かれしかは淺岡氏は却て之を氣の毒に思ひて其撰まれたるを喜びにそすれ聊かも恨めしく思ふ事かはと懇に慰められしと聞く

紀者は明治三十七年六月光三等か哈爾濱にて銃殺

【二十八a】

せられしと東京各社の新聞に記載せられし事に関して淺岡氏に質したるに氏は此に一條の老母の爲に君に話し置んと思ふこと有りと一封の書牘を示されぬそを披き見るに

拜啓仕候脇光三様事兼て○○の○○に依り○○○○の途に就かれ候處不幸露人の爲め捕はれ哈爾濱に於て死亡致され候由に及聞候間此段御報知申上候露國

に於ても士の礼を以て處理し怡然死に就れ候事とて  
國家の光輝一層相増し候事と弊社一同満悦を表し候  
猶近日中追悼會をも相催すべく候今や千載一遇の秋  
に際會し國家の爲に盡すへきは上下の齊齊しく期す  
る  
【二十八b】

所に有之候て御本人今回の死去の如きは真に國家の  
爲めに尽されたる名譽の死亡に御座候得ば御愁傷の  
幾分を御割き被下候様願上候先つは不敢取敢御報  
知申上候勿々頓首

六月一日 北支那 毎日 新聞社

浅岡 一殿

と有り浅岡氏は猶紀者に語りてこれぞ東京各社の新聞に  
中山直熊氏と共に光三が哈爾濱にて斬殺せられしとか銃  
殺せられしとか喧傳せし事の基源なりしなるべし且此書  
翰は自分か華族女学校にて執務中到着せしことなりしか  
は當時同校に在りし同僚の下田歌子女史を始め佐野安土  
屋弘秋山四郎杯いへ  
【二十九a】

る人々に窃に此書翰を示したるに名譽の死とはいへ其子  
の死を聞きしからには今日は家に帰られよ但し御老母は  
九十一の高齡なれば縦令壯健にもあれ不意に愛孫の惨死  
を聞かば如何なる變有るも圖られず寧ろ秘して語らぬこ  
そよけれ杯と忠告せられて余は我家に帰り妻子に光主  
の事を北支那毎日新聞社よりの書翰を示し先つ四五日か  
程は其俣に打過ぎしか一週日も立ちけん折新聞紙に喧傳  
せられ知ると知らざるとに拘らす訪つる、人の多かりけ  
れは廣くもあらぬ家の内にて秘し置かんことの困難なり  
しかは余は妻と共に徐ろに母に光三のことを告けたるに  
老母は驚きもせぬのみかは光三の死を賞揚し戊辰の年一  
家親戚の國事二斃れし  
【二十九b】

当時不祭の鬼となりて葬ることも叶ハす弔ふことも叶は  
ず敵方の守備兵の眼をかすめて遺骨を尋ね索め僧侶を  
頼まんよしもなく汝等兄弟自分ら一切の事を爲して骨を  
埋めしにあらすや齊しく死しなからも光三は天皇陛下の

御爲に忠義を尽して死したりとならば此上もなき面目なり彼か何處にか行きしと聞きし後は斯くあるへしとは豫ての覚悟なれば今更何をか驚かんとて眼前にて北支那毎日新聞社の書翰を讀ましめて喜ばれ猶幼年なる光三の弟共を激励せられし由淺岡氏は語られ猶語を續きて三十七年五月頃の事にやありけん哈爾賓電報なりとて日本人か哈爾賓北方の鉄

【三十 a】

道線路に於て捕はれたりとの事を清國芝罘<sup>チーフ</sup>の新聞に載せられ其後此電報が大坂毎日新聞にも掲けられたる際北京公使館にても已に横川沖の遭害後の事とて右の電報は若シヤ横川沖の同行者に関する事にもや抔と評し合へる時に際し他方面より帰り来りし矢張特別任務を帯ひられたる人々の話に右の哈爾賓電報と符合する事もありて松崎田村中山及光三か害に逢ひしならんと思はるゝふしの有りしかは其疑念を晴さん証據もなく当局者の疑問の一として秘し置かれしを洩れ聞きし者な有りて果ては北支那毎日新聞に其事記載せられ同時に新聞社は中山氏と余

とに對し通報を發

【三十 b】

したれば此新聞の東京に郵送せらるゝと共に世上に實事の如く喧傳せられしなり但し實際は四月十五日に「チャライト王旗下「チャサタスト」とかいふ所にて殺害せられたるものなれば横川、沖二氏の銃殺に六日ばかり先たちて死したるもの、如し併し其事も三十九年四月までは判明せざりき

猶三十九年 月に至りて明治三十七年四月十五日の日附もて左ノ辞令書を淺岡氏に下附せられぬ

陸軍通訳脇光三

明治三十七年戰役ノ功ニ依リ勲六等單光旭日章

及金千円ヲ授ケ賜フ

明治三十七年四月十五日

【三十一 a】

賞勲局總裁正三位勲一等子爵 大給 恒

○十行ヲ明シ置ケル

と有り

其後明治<sup>マ</sup>明治四十年八月十五日の日附をもて奉天城内邊見勇彦氏方橋口中佐随行員田村利平の名をもて浅岡氏ニ宛て左の書を寄せらるれぬ

拝啓仕候陳者故志士脇光三君等四士之遺骨收拾ノ目的にて陸軍中佐橋口勇馬殿一行去五月五日奉天出發蒙古各地ヲ経テ「チャライト王旗下」「クローンボ」ニ至り脇君松崎君及亡弟田村一三等三士の遺骨收拾チャサクト王旗下チャンガルブタオハイニ於て中山直熊君ノ遺骨

【三十一b】

収容仕り各火葬し本月三日当地まで帰着仕候当地に於てハ元特別任務に従事せられたる各士及四士の知己友人等参拝有り尚一昨十三日橋口中佐殿及前記各位ノ發起にて追悼法会執行来奉中の参謀次長福島中將閣下其他將校各位臨場嚴肅に相営み申候上本日遺骨は小包郵便にて送達申上候間左様御承知被成下度候然して遺骨の幾分は北京公使館内忠魂祠堂に納付

の筈にて昨日古川少佐殿に托し送附仕候尚遺骨収容より追悼法会迄詳細は橋口中佐殿より御報相成る筈に候右不取敢勿々敬具

【三十二a】

明治四十年八月十五日 故一三 兄

脇光三君御遺族 田村 利平

浅岡 一殿

右の書面到達後数日にして橋口陸軍中佐より左の書状到着しぬ

拝啓尊堂皆、様御様益々御清適之所奉恭賀候然ハ日露開戦に際し蒙古方面に於て特別任務の爲めに斃れたる四勇士の遺骨を收拾し得ざる儀兼て青木大佐を始め同志者に於て遺憾に存居候處本年五月時機を得て小生等一行搜索に任すること、相成当時の戦死点と認むる札賓<sup>チャライト</sup>特札薩<sup>デヤスト</sup>圖

【三十二b】

両蒙古王か旗下に至り当該王府官吏等の奔走尽力に依り興安嶺下なる現地に於て諸事都合よく遺骸を發



見いたし得候に付直に火葬に附し遺骨を拾収して本月四日無事当奉天迄持て帰ることを得たる次第に御座候是れにて三年間の長時間不葬の鬼となり遺恨極りなかりし志士の英魂を慰むることを得たりと存せられ候札賓特王府に於て若干の遺留所をも取得致候へ共是れは其何れの所持所なるやを判明致さず今猶彈痕染血の跡を認め候二付將來我國の士氣を鼓舞する上に少からざる裨益可有之と存候間追て遊就館に納め廣く

【三十三a】

衆人の展覽に供し度と存し候又札賓特王府より此際祭糝料として銀一百両ツ、送附方依頼有之候間時價に照らし金貨に換算し別紙爲替券の通り御追送申上候間御查收可被下候追て墓側に燈籠一對にても御建立被下候ハ、志士永遠の紀念と可相成と存候当地帰着と同時に祭典を執行いたし候處恰モ福島中將閣下の御来奉に際し御臨場被下死者は元より同志者に於ても最光榮の儀と存候間御参考まで申進候式場の景

況撮影いたし候間書出来次第御送付可申上候猶搜索に關する記事現地附近之畧圖等は書出来次第御送付可申上候

【三十三b】

遺骨は小包郵便にて御送付申上置候間可然御了知可被下願上候不取敢右形行御一報如此に御座候敬具

八月十七日

奉天城内邊見勇彦方

橋口勇馬

浅岡 一殿

此二通の書面と相前後して遺骨も■到着せし故浅岡氏にては更に四十年九月十日青山向山の光三の遺髪を埋めたる所に更に其遺骨を埋め祭典を執行せり祭文は此に畧す此後数日にして奉天にて祭事を執行せられし

【三十四a】

時の寫真は到達しぬ其裏面に参■列者の氏名をしるしありき

竹内

三好

安達都

森田兼藏

土屋

峯大尉

堀米大尉

高畠

田實

原田

前田豊三郎

河崎 武

榎本

井深彦三郎

佐藤少佐

橋口中佐

四士遺骨

僧侶

田村利平

松本菊熊

木下

邊見勇彦

福島中將

古川少佐

境副領事

伊木大尉

山崎

前田少尉  
和田俊雄

と有り其氏名を書したるも有り只氏のみを書したるもあり皆原書の俣こゝに掲く

紀者曰く余光三を見しこと一回明治三十四年四月にし

【三十五a】

【三十四b】

て光三か度清前一年の前にありき隆鼻由巨眼白皙長身の好丈夫にして舉と止沈着言語明晰尋常■の青年書生にあらず余郷党に語るに彼か前途有望の書生たるを以てす大志を抱きて遂げず中途にして斃る惜むべきかな然れとも彼其志士たるを失はず舉世称之を称す光三其れ瞑すへし

石橋貞幹紀す【三十五b】

注

- (1) 陸軍の秘密工作については、とりわけ情報将校である福島安正（一八五二—一九一九）の果たした役割と功績が重要であるが、近年ではインテリジェンス研究の視点からも新たに掘り起こされている。例えば、澤田次郎氏による一連の研究を参照（「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作——一八九〇年代から一九一〇年代を中心に——」（一・二））（『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』四〇・四一、二〇一八年一月・二〇一九年三月ほか）。
- (2) 松島宗衛『烈士横川省三』（烈士横川省三銅像建設会、一九二八年一〇月）、二六七—二六八頁。
- (3) 光三の事跡については、石橋貞幹『脇光三傳原稿』（一九〇八年六月）、井戸川辰三『日露戦役殉国志士事跡』（秀英舎、一九〇八年九月）、田中正明『落つる夕陽よしばらくとまれ』（拓殖大学、一九八三年三月）、『拓殖大学百年史 通史編一』学校法人拓殖大学、二〇一六年三月）などに拠る。なお光三の呼び方については、当時の新聞や著作のうちには「みつぞう」「こうぞう」とルビが振られるものが混在しており、一定しない。以前、拓殖大学創立百年史編纂室（現拓殖アーカイブズ事業室）が光三の子孫に聞き取りを行った際に「こうぞう」との呼び方への訂正がなかったことや、拓殖大学内では「こうぞう」と呼び習わしていることを付記しておく。
- (4) 「脇、中山両志士の名譽」（『東京朝日新聞』一九〇四年六月二五日期刊）、二頁。引用に際してふりがなは省略した。以下、引用に際してふりがなの類は全て省略する。
- (5) 例えば、「内親王と戦争」（『東京朝日新聞』一九〇四年四月二二日期刊、一頁）、「高輪御殿内の戦死者祭壇」（『東京朝日新聞』一九〇四年六月六日期刊、二頁）、「日露戦争時事画報 二（八）」（時事画報社、一九〇四年七月）における綴じ込みの石版極彩色画「高輪御殿の御吊祭」（絵・湯川松堂）など。
- (6) 研谷紀夫「明治期における内親王の肖像とそのメディア表象——小川一眞の周宮房子内親王の肖像写真を中心に」（『映像学』一一一、日本映像学会、二〇二四年二月）、二六—二七頁。
- (7) 石橋貞幹『脇光三傳原稿』（一九〇八年六月）、一三一—一四丁。引用に際して取り消し線などは略した。
- (8) 浅岡が華族女学校教授を任じられたのは一八九三（明治二六）年一月二七日からだが、翌年一月には早くも幹事心得兼務、同年三月には学監事務取扱、そして一八九五（明治二八）年九月には幹事を兼任している。一九〇六（明治三九）年四月一一

日には華族女学校の教授兼幹事が廃官となり、浅岡もそれを承けて福島県立会津中学へ移るが、浅岡は日清・日露の両戦争にまたがり華族女学校に奉職していたことになる。なお、浅岡の華族女学校における経歴については、学習院アーカイブズ・桑尾光太郎氏にご教示を得た。

(9) 以下、図1・2の写真資料は筆者の撮影による。

(10) 撰文は福島によると刻されるが、青木・橋口・井戸川らは、漢学者である安井小太郎（一八五八—一九三八）にも撰文を依頼していたようである。安井による撰文は、全文が『大正詩文 第六集』（雅文会、一九一六年四月）に収録されるが、その題は「報国六烈士碑<sup>代</sup>」と記される。碑文内容と安井の撰文を校合するところ、内容は大きく変わらないものの、字句の入れ替えや省筆がみられるため、恐らく福島撰文として碑に刻むために、青木らが安井に代稿を依頼したとも推測される。なお安井の撰文はその後複数の雑誌に掲載されるが、その一つである、当時安井が教授を務めていた大東文化学院が発行する『大東文化 第七号』（大東文化学院編集部、一九三四年七月）の執筆者紹介欄には、「蓋し先生当時北京に在つて六烈士と俱に諸種の事業に尽悴せられたれば、其の壮図に関し最も精知せらる」（六〇頁）とある。安井は一九〇二（明治三五）年から一九〇五（明治三八）年まで、北京の京師大学堂訳学館教授を務めており、その頃の自筆稿『寓燕日記』には、横川省三や沖楨介、脇光三らと交流を持ったことが記されている（陳捷「安井小太郎『寓燕日記』解題・翻刻」『東洋文化研究所紀要』第一八三冊、東京大学東洋文化研究所、二〇一三年三月）。

(11) 以上、池野藤兵衛編『明治の青春横川省三——日露戦争と志士群像』（牧野出版、一九八〇年十一月）、一八〇頁。

(12) 勝又太郎編『最新案内モリヲカ』（新東北社、一九三二年一月）、八九頁。

(13) 東京市麻布区編『麻布区史』（東京市麻布区役所、一九四一年六月）、九二四—九二五頁。

(14) 注一 前掲書、七四頁（頁表記なし）。自由民権百年記念・歴史研究会編『岩手の自由民権運動史』（一九八一年九月）、五六頁。なお銅像は一九四四（昭和一九）年中に供出され、現在では台座のみが残る。

(15) 「沖楨介記念文庫」（『大阪朝日新聞 九州版』一九一六年七月一日〜二五日、長崎県第一冊五、一四六頁）。閲覧は、『神戸大学新聞記事文庫』日本（五—三四）より。

(16) 同盟通信社編『時事年鑑 昭和一三年版』（同盟通信社、一九三七年一〇月）、五七七頁。この銅像も一九四四（昭和一九）

年中に供出されたという。

- (17) 松崎保一の記念碑は、田中正明『落つる夕陽よしばらくとまれ』（拓殖大学、一九八三年三月）五六七頁を参照。田村一三  
顕彰碑は、注一一前掲書八五頁（頁表記なし）を参照。
- (18) 「東洋協会報告」（『東洋』三四（六）、東洋協会、一九三二年六月）、一九九頁。
- (19) 「拓殖大学百年史 通史編二」（学校法人拓殖大学、二〇一七年三月）、三三五頁。
- (20) 巖徹生「脇光三君を弔ふ歌」（『学友会報』第四〇号、東洋協会学友会、一九一九年一月）、三一―三二頁。宮原民平「烈士  
脇光三氏傳」（『学友会報』第八二号、拓殖大学学友会、一九三〇年二月）、八一―八二頁。
- (21) 「桜花吹きしる紅陵に烈士脇光三氏記念碑除幕式挙行さる」（『拓殖大学新聞』第五二号、拓殖研究室新聞学会、一九三一年五  
月二〇日）、三頁。
- (22) 『拓殖大学百年史 通史編二』（学校法人拓殖大学、二〇一六年三月）、一三三頁。
- (23) 注一九前掲書、三三五―三三八頁。
- (24) 大学構内に建てられた個人の顕彰物としては、「烈士脇光三碑」以外にも、戦後に大学理事長を務めた西郷隆秀（一九〇七―  
一九八五）を記念した「西郷隆秀先生顕彰碑」が八王子国際キャンパス内に建立される。ただし、同顕彰碑は戦没者を記念す  
るものではないため、本論旨の対象外となる。
- (25) 大寄文友、北野源治『烈士脇光三氏伝』（彦根市役所、一九四三年三月）、八五頁。
- (26) 井戸川辰三『日露戦役殉国志士事蹟』（一九〇八年九月）、四五頁。
- (27) ほかに横川班を含む特別任務班全体を扱った、大島与吉『爆破行秘史』（満洲文化協会、一九三三年二月）もあるが、ここ  
では横川班に絞ったため表からは除いた。なお著者の大島は、横川班が属した特別任務班第一班のうち、「伊藤班」に属した班  
員の一人である。
- (28) 利岡は、一九三二（昭和六）年六月に「キリスト教秘話志士横川省三氏」を発行したというのが（『利岡中和遺稿集』利岡和  
人、一九七二年二月、七五八頁）、現物確認がとれないため表からは除いた。
- (29) 村尾要三『志士沖楨介』（春陽堂、一九〇四年八月）、一〇四―一二頁。

- (30) 財団法人ハルビン六烈士事績保存会主催「六烈士追憶の夕べ」リーフレットより。なおこの他の映画としては、『特別任務班 日露戦争秘史興亜の人種』（旭日映画、監督・山下元廣）なるものが一九四一（昭和一六）年に製作されたようだが（『国立映画アーカイブ』より）、詳しいことが不明のため注記に留める。また、一九三二（昭和七）年五月六日より上映された『陸軍大行進』（松竹、監督・清水宏ほか）にも、横川と沖を連想させる人物が登場するという。
- (31) 日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和一年』（日本放送出版協会、一九三六年六月）、七九八二頁。なお、東家楽燕による講演は、水野草庵子編『東家楽燕講演集』（高山堂書店、一九三六年六月）に収録される。
- (32) 「北満の落花（六烈士事績保存会会報）」（財団法人六烈士事績保存会、一九三六年五月）、二頁。
- (33) 「国立国会図書館サーチ」による。福岡県立図書館蔵。
- (34) 田中正明『落つる夕陽よしばらくとまれ』（拓殖大学、一九八三年三月）、五五〇―五五一頁。
- (35) 注三四前掲書。
- (36) 宮澤正幸「拓殖大学鎮魂歌（序曲）——烈士脇光三と河原操子——」（『新日本学』二九、拓殖大学日本文化研究所、二〇一三年六月）。
- (37) 近年でも、拓殖大学政経学部教授・丹羽文生氏による「日露戦争と脇光三」と題した文章が、『日本戦略研究フォーラム季報（九九）』（二〇一四年一月）に掲載される。
- (38) 浦田銀六「沖楨介銅像復元に寄せて」（『郷友』一四三、一九六七年一月）。池野藤兵衛編『明治の青春 横川省三——日露戦争と志士群像——』（牧野出版、一九八〇年一月）。幕内満雄『獅子の夢——明治人横川省三・その生と死——』（叢文社、二〇一一年九月）。ほか、池野藤兵衛による横川省三に関する複数の論考や、郷土である岩手県内刊行物に横川省三に関する言及が確認可能。宮崎県延岡市「亀井の丘夢づくりの会」による、小嶋政一郎「純情志士 松崎保一伝」の復刻事業（『市民まちづくり活動支援事業 令和六年度採択事業一覧』）。「第五二回企画展「横川省三——日露戦争の英雄の真実——」（盛岡市先人記念館、二〇一四年一〇月七日―十二月七日）。
- (39) 「愛国の士が縁の姉妹提携」（『岩手日報』一九八二年一月二二日付）。
- (40) 例えば、沖楨介は東京専門学校（現早稲田大学）中退の学歴を有するが、友人や後輩たちが企画参列した追悼会が一九〇四

〔明治三七〕年六月五日に東京本郷区の麟祥院で催され（注二九前掲書）、そこには当時早稲田大学の学監であった高田早苗（一八六〇—一九三八）も本校を代表し参会したことが、校友会誌である『早稲田学報』（一〇二号、一九〇四年七月、四三頁）で報じられている。ただし、このような追悼会が学校としてその後も継続的に挙行されているかといえば、そのような動きは管見の限り認められないようである。沖禎介について、『早稲田学報』をはじめとする学内刊行物に関しては、早稲田大学歴史館東伏見アーカイブズ・柳啓明氏にご教示を得た。なお、横川班のうち国内における最終学歴が専門学校であるのは、沖と光三だけである（ただし両者ともに中途退学）。横川省三、松崎保一、田村一三、中山直熊の四名は、最終学歴としてはいずれも中学校卒となる。

〔41〕現在の建学の理念「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為の人材の育成」は、創立六〇年（一九六〇年）に出された『拓殖大学六十年史』の序文のなかで、当時の総長・矢部貞治（一九〇二—一九六七）が、現代の言葉で表現したものである。

〔42〕『校友会報』第八六号（拓殖大学校友会、一九三一年六月）、一頁。

〔43〕石橋貞幹について、以下の文献を参照した。平島郡三郎『二本松寺院物語』（歴史図書社、一九七五年四月）。『二松学舎百年史』（学校法人二松学舎、一九七七年一〇月）。阿津坂林太郎編『地方史文献総合目録 上巻（戦前編）改訂版』（巖南堂書店、一九八二年一月）。『二本松市史 第九巻』（二本松市、一九八九年五月）。

（原稿受付 二〇二四年一〇月一六日）